
討伐！ もっちょ ↓ みっか

生保内沙翁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

討伐！ もツちエゝみツか

【Nコード】

N0133Y

【作者名】

生保内沙翁

【あらすじ】

異世界に飛ばされた貴族的な木元菊は、「ヴえブリチまでにもツちエゝみツかを倒して戻ってこい、そうすれば元の世界に帰してやろう」という理不尽な申し出をされ、受ける羽目になった（だって、選択肢はないだろ？）。彼は二人の仲間——大佐と呼ばれる男と魔女と呼ばれるバベル——と一緒に、もツちエゝみツか退治の旅に出る。彼はヴえブリチまでに無事目的を達し、元の世界に戻るのだろうか？

斧と魔法のファンタジー・コメディー！

一番最初の“一”（前書き）

注1：人種差別ではありません。

注2：もちろん、この物語はフィクションです。

一番最初の“一”

ゴキブリみたいに黒いやつが前を歩いている。

木元菊は足を止め、広がる草原と、森の奥へ続いている踏み固めた土の道を見つめた。彼は水洗いしたキャベツのように汗をかいていた。ゴキブリみたいに黒いやつが振り返る。木元菊は斧についた革ひもの位置をずらし、ギターのように背負い直してから、縦巻口ールの鬘の位置を動かす。そして、何か言われる前に歩き出した。そいつの態度が癪に障るからだ。

それでもゴキブリみたいに黒いやつは、無意味に大声を張り上げた。

「急げ！ 我々に残された時間は少ないのだ！」

木元は大声でわめいているそいつの脇を大股で通り抜けると、前方の森だけを見つめて進んだ。そよ風が吹いて、道の脇に生えた草を揺らす。風に流れる雲も、最高潮に達した陽も、いい天気というには度を越している。彼はいびつな顔をしかめた。

彼よりも一層ひどいしかめっ面をしたゴキブリみたいに黒いやつが、規律正しい歩き方で彼を追い抜いた。ただ、身長が百二十を超さないか程度で、足も同様に短いため、その歩きは速足以上の動きをしていた。木元は上半身だけは悠然としたそいつを後ろから眺めた。頭を髪の毛があれば犯罪とでも呼べそうなほどつるつるにしていて、身の丈に合った軍服を着ている。後ろから見れば、威厳というよりもコミカルな感じの付きまとう姿だ。

木元は追い抜いてその顔を子細に見つめた。そいつの顔には眉がなく、落ちくぼんだ眼はほとんど影で、武骨な鼻から岩のような顎まで太いしわが刻まれている。鼻からは、しわだけでなく鼻水も垂れている。この国共通のことなんだろう、と木元は思った。私が引きずり込まれたアナフあベータ村の人間は皆、鼻水を流していた。

それに、その村人から大佐と呼ばれているこいつ同様、村人たちは皆、頬に赤い丸を描いていた。木元は不愉快な思いが募ってきたので、その村のことを思い出すのは止めた。ゴキブリみたいなやつが真剣な表情で追い抜く。

木元はそいつを見つめる代わりに、歩きながらも一人の同行者へ目を向けた。バベルだかダンベルだか名乗ったそいつは、大佐よりも二十センチほど高く、真っ黒いローブに身を包んでいる。フードを深めに被り、一見して水死体と間違うような顔をしている。食料品を詰め込んだリュックを背負っていて、前かがみに一番後ろを歩いている。あの村で魔女と恐れられているそいつが、木元の視線に気づいた。

不明瞭な声で尋ねる。

「何か？」

「魔女なら私たちを一瞬で街まで運ぶ魔法ぐらい知ってるだろ」

木元の声は貴族的ともいうべき甲高さで、怯えたネズミのように聞こえる。ただし、調子は傲慢以外の何ものでもない。

「他にも、馬車を出す魔法とかな」

魔女は膨れ上がった顔を振った。

「悪いけど、私の呪文は攻撃的なんです。あなたを吹き飛ばすことはできますが、傷一つ負わず着地できるかどうかはあなたの腕次第になります」

「役立たずが」

木元は鼻を鳴らし、前方の森に視線を向けた。魔女が何か言った。しかし、それは大佐の声に阻まれて木元の耳には届かなかった。

「無駄口は慎め！」

大佐は怒鳴った。

「歩くこと、辺りを警戒すること、注意はそれだけに向ける！ 我々はいっつも狙われてもおかしくない状況なんだ！」

木元はいら立ちを隠しきれない表情を浮かべていたが、大佐を早くも追い越していたので、態度についての説教は始まらなかった。

彼の脇を忙しそうに足を動かして大佐が追い抜く。まったく疲れていないようだ。

三人は夕刻近くなつて森に入った。道は草に覆われて消え、枝葉が空を隠して周囲を影で包む。

先頭の大佐は直進せず、あるところは大回りをし、あるところは直角に曲がつて進んでいた。木元はしばらくして気づいたのだが、大佐が回り道をするのは警戒のためではなく、単純に倒木があつて乗り越えるのに苦勞するからだつた。彼なら一跨ぎの倒木も、二人にとつては登らなければならぬ小山と同じなのだ。

暗闇が森に降りてきて、辺りがまったく見えなくなつてから、大佐が宣言した。

「そろそろ、休憩を取ろう」

木元は足を止め、その場に座り込んだ。魔女は木の幹に背を預けるようにして、荷物と腰を下ろした。大佐は宣言と同時に寝つ転がり、早くもいびきをかくほど爆睡していた。

「こいつは見張りとか考えないのか」

木元は強力なエンジン音に似たいびきをかいている大佐を軽蔑したように見つめる。その姿は猫のフンか何かを連想させた。

「心配なら、役立たずの私が何とかしますけど？」

木元はその声に嘲笑の響きを聞き取り、鬘を荒々しくむしり取つて地面にたたきつけた。斧を外し、鬘を枕代わりに寝転ぶ。

そして転がつたまま言つた。

「まだ根に持つてたのか。恥ずかしいやつだ」

魔女は何も答えなかった。木元は目を閉じた。彼は汗だくだったが、鬘を取つたためか夜の森は涼しく、お腹が空いているのも忘れてうとうととまどろんだ。この鬘はごわごわしているな。

しばらくして何かが不気味な声を發した。木元はハッと目を覚まし、使つたことのない斧を握つて、闇に慣れた目を辺りに走らせる。声が聞こえた。

「この森にはイブカニアという鋭い牙をもった獣がいます」

魔女の声だった。彼女は深く幹にもたれたまま言った。

「あなたを丸呑みするほどの大きさです。私が結界を張れば、彼らは近づくことすらできませんが」

木元は想像し、しっかりと斧の取っ手を握りしめ、丸まる。不安を感じながらも精一杯の虚勢を張った。

「私を怖がらせようとしても無駄だぞ。おまえがさっきの声を出したんだ」

「なっ」

魔女が言葉を詰まらせた。

「そ、そんなことは、ありませんよ。今は、間違いなく、イルカニアの声でした」

「イブカニアだ」

木元は訂正した。

「えっ？」

「イブカニアだ」

木元はもう一度言った。説明を加える。

「おまえが最初にいった名前はイブカニアだった。それが、イルカニアになっていた」

「そ、そうでした」

咳払いをして魔女は続ける。

「もちろん、イブカニアです。ちょっとした間違いは、誰にでもあります」

「そうだな」

木元は斧から手を放した。身体を伸ばして鬘の位置を直し、目を閉じる。

「結界を張っておけよ、イカサマ師」

「イカサマじゃないもん！」

木元は子供っぽい口調になった魔女を相手にせず、大佐のいびきを子守唄代わりに（それにしてはうるさすぎるが）眠りに落ちた。

二番夢の“二”

木元はスカイツリーを背にして立っていた。視線の先には、イタリア系のアメリカ人が彼の渡したデジタルカメラを構えている。どこか冷静なところが、これは夢なのだと告げている。

突然、クイツと引かれたような気がした。木元はスカイツリーを振り返り、そのとき——「ヘイ！」という声で前を向きなおした。アメリカ人が、彼の渡したデジタルカメラの上で、迷惑そうな表情を浮かべている。彼はしかめ面を返し、指を一本立てて——中指ではなく、人差し指だ——もう一度、と頼んだ。アメリカ人は眉を寄せたが、何も言わずにカメラを構えなおした。

木元は気取った表情を浮かべ、スカイツリーを手のひらに載せて、シャッターが切られるのを待った。アメリカ人はその意図を読み、少し下がって、気取った木元と手の上に載った未完成のスカイツリーをフレームに収める。また、クイツと引かれた。今度は少し強かったので、木元はバランスを崩し、立て直した。後ろを振り返って、少し離れたところを歩いていた東京人に睨みを利かせる。

アメリカ人が言った。

「ドント・ムーヴ」

後の言葉は小さな早口だったので、木元の手に残った。「メイキットスナッパイ」と聞こえた。

木元はなだめるような仕草をしながら言った。

「オーケー、オーケー」

そしてポーズをとる。二度、シャッターの音が聞こえる。彼はカメラを返してもらい、お礼をつたない英語で——「サンクス、ベリーマッチ」——言いながら、撮れた写真を確認した。ま、素人にしては、なかなかうまく取れてるじゃないか、と彼は思った。私の魅力的な顔が、引き立ってるな。

彼の顔は、どこかの惑星では、魅力的かもしれない。輪郭は、いびつな形をしたホームベースで、薄い切れ込みと豚のような鼻をつけている。丸い目は愛嬌を見せることができるものの、普段はビーズと大差ない。整った眉はへの字を描き、短い逆立てた髪の毛の生え際はしっかりしている――が、今は縦巻ロールの髪をかぶっているの、自慢の生え際は隠れている。

彼が写真を覗き込みながら、次はどこで撮ろうか、それとも携帯電話を買いに行こうか思案していると、また引つ張られた。今度の引きは強力だった。彼はよろけ、バランスを立て直そうと腕を大きく振り……引きがさらに強くなって……飛び上がる。そう、そんな感覚で、周囲の景色は一変し、田舎じみた香りが彼を包み込んだ。上昇から一瞬の無重力を（木元は髪が浮くのを感じた）体験して下降に入る。

「いやだあ」

木元は自分でもわからない悲鳴を上げた。

「許可を！ 許可を取ってから……」

彼は腕から固い地面に落ち、ボールのように転がった。勢いが止まると、そこには空があった。彼はそれを丸い目で見つめた。無感動で思考のない一瞬、彼は死んだも同然だった。そういう時の顔は、解剖されそうな力エルとよく似ている。

数秒待つて彼は上半身を勢いよく起こし、視線をあちらへ、こちらへと移した。そこは都心にも郊外にも見えなかった。踏み固められた地面、全体を囲むような木々、木造の小さな家。彼がいるのは広場らしく、噴水の代わりに井戸がある。そして、小さな黒い人、人、人。長く太い腕、短い脚、ピエロのように赤みのある頬、だらしなく鼻水を垂らした武骨な鼻、横だけが異様に長い黒い髪、太くて黒い眉、汚水の流れる溝にこびりついた水垢のような、灰色がかった黒い肌。木元は恐怖の悲鳴を上げた。

場面が変わるように、夢が声を運んでくる。

「ヴえブリチまでに」

それは裁判長じみた口調の村長の声だった。

「もツちエ←みツかを倒して戻ってくれば、元の世界に帰してあげよう」

今は、気取った落ち武者のような村長が現れてから一分後、木元が集団に囲まれ——強烈な恐怖を覚えて混乱の粹を極め——会話ができるようになってから三十分ほど経った後だ。その前は……その前は確かに普段通りの世界で、昼を少し回ったところだった。が、ここは朝の早い時間になっている。

木元は猛烈な抗議を続けていた——そういう気がした。

「なぜ私がおまえらのいうことに従わなければならないんだ！」

気取った落ち武者は言った。

「ヴえブリチまでは、暗闇がこれだけ——」

落ち武者は大きな手を見せ、三本の指を立て、二本を丸める。木元と同じ五本指の手だった。

「——訪れるだけある。それまでに戻れなければ、元の世界に帰ることはできない」

「なぜ私がおまえらのいうことに——」

「ヴえブリチまでだ」

村長は遮り、木槌があれば振り下ろしそうに、太い腕を動かした。

「期限を守れ」

「だから、なぜ——」

「もツちエ←みツかを倒すんだぞ！」

彼はそこで、これは聞いてみる価値があると判断したのだった。

もツちエ←みツかは、村人の説明によると、ドラゴンに似た生物だとわかった。その生物の体長は、村人の身長からして巨大で、彼らの小さな三角の家を丸呑みできるほどもあり、もツちエ←みツかとは、名をつけるときに使う言葉で『神の懷』を意味するらしい。

どんな神なのか知らないが、と木元は夢の中で思った。あいつらサイズの神なら、懷の具合もたかが知れているだろう。コモドラゴンかもしれない。コモドラゴンなら、この斧で叩き切ってしまう

える。とにかく、この重たいだけの斧も、それだけの役に立つ必要があるんだ。まずは、ストロンボ街へ行く。そこでコモドドラゴンの生息地を聞き込み、探してそいつの頭を叩き割れば……。

案内兼護衛役の大佐（彼は村人の推薦）と魔女（こっちは名乗り出た）が仲間に入る経緯を夢で思い出しかけ、今度は学生時代に飛んだ。しかし、そこでも後ろから引かれる感じを覚え、またアナフあベータ村に戻ってくる。そして、腐れ落ち武者村長の言葉を聞く。「ヴえブリチまでももツちエーみツかを倒して戻ってくれば、元の世界に帰してあげよう」

ヴえブリチって何だろう？ 期限って言葉を、この国流に言うつとヴえブリチになるんだろうか。彼はちくわみたいに空洞の頭を働かせて考えた。腐れ落ち武者村長が、彼の両肩を大きな手でつかみ、三十メートル離れて見ても我慢のならない顔を十数センチのところにおいて、同じ言葉を繰り返す。

「ヴえブリチまでに……」

身体が前後に揺れ、そして、顔に強烈な痛みが――。

三番食事の“三”

木元は目を覚ました。辺りはまだ暗く、寝起きのためか霞がかっている。月明かりが照らす薄闇の中に、大佐のいかめしい顔が浮かんでいた。本能寺で炎に包まれても哄笑を上げそうな顔だった。

「とつと起きんか、このうすのろ！」

木元はなぜか痛む顔をさすりながら起き上がった。あくびをし、伸びをして、大佐の巨大な拳骨に殴り飛ばされる。眠気は吹き飛んだが、意識も吹き飛ぶところだった。

「私に気安く触れるな！」

木元は何かにすぎりつこうとしている恰好のまま、頬に手を当てて叫んだ。

「おまえが大佐なら私は貴族だぞ。敬意を払え！」

魔女が身じろぎをして、子犬がどうのこうのと寝言のようにつぶやいた。背にしていた幹から滑り、地面に寝転がって、食料品の詰まったリュックを縫いぐるみのように抱えている。

大佐が怒鳴った。

「貴族だろうと何だろうと、もっちエ←みツかを倒すまでは戦士だ！」

魔女がもう一度身じろぎをして、上体を起こし、目をこすりながら言う。

「うるさいなあ。いったい何事？」

大佐は珍しく静かに答えた。

「出発の時間だ。手早く食事を済ませるんだ」

魔女が目をこするのをやめて、森を見回す。

「まだ夜だけど？」

「いや、早朝だ」

魔女は寝転がりながら言った。

「夜が明けるまで待てばいいよ。それほど急ぐ必要もないから」
あくびをして続ける。

「森は後少しのはずでしょ。抜ければ小さな山を越えて、夜までにはストロンボ街に着くよ」

大佐の怒号が地面を揺らした。

「我々もツチエーミツかを倒さなければならんだ！ 帰る期間も勘定に入れなければならん。夜までに着くなど、話にならん！」

「あれの居所はすぐにわかるよ。国の出した討伐隊もいるし、私たちが協力するといえば、情報の一つや二つ貰えるはずだし」

大佐の唸り声が響き、森中の鳥が飛び立つ。

「いいだろう、わしとバベルの意見は分かれた。決めるのは木元、おまえだ！」

口を開きかけた木元を制し、大佐は言葉を続ける。

「一つだけいっておくことがある。バベルの案に従えば、街に着くのは夜になるだろう。わしの案に従えば昼前には着く。ストロンボ街の宿は人気だ。夜着いても、部屋が埋まっっていて、また野宿ということになるかもしれん」

木元は重々しくうなずいた。決定権が彼の頭の中で主導権へと変わっていた。彼は自分是有利に立っていると考えて、機嫌がよくなつた。立ち上がり、口を開く。心の中で叫んだ。私に媚びろ、愚民ども！

魔女が素早く立ち上がって荷物を引つ掴んだ。

「この人の決定を待つ必要はないよ、大佐」

畏まった口調で続ける。

「話を聞いて感銘を受けました。私はあなたの案に従います」
大佐は雄たけびを上げた。

「決まった！ 食事後に出発だ！」

木元は開いた口を閉じきれないまま、言葉も思いつかず呆然となった。何がこんなにイラつくのだろう、と彼は考えてみなければならなかった。まるで、待ちに待ったものを差し出され「これはお

まえのものだ」と宣言された後で、奪い取られたかのようなのだ。だがそれは結局、あいつとあいつが要らないと言うから……では、主導権が向こうにあったから、イラついているのか？ それに素早く手を伸ばさなかった自分のうすのろさへの苛立ちが加わっているのか？

木元菊が神経に触る元凶を捜している間に、魔女は荷物から食料を取り出し、手早く朝食を作った。大佐は自分の太い手ごと食いちぎりそうな勢いで食事を済ませると、木元をどやしつけた――「早く食わないと昼まで食事抜きだぞ！」

内にこもっていた木元は、追い立てられるように食事を済ませた。そして三人は出発の準備を整えた。

「早く着けば、それだけ早く休めるぞ！」

大佐が先頭を切った。

四番戦闘の“四”

イブカニアは本当にいた。そいつは唐突に現れた。

魔女が夜間を安心して過ごせるように張っていた結界を解いた時、待っていたように連中は姿を見せた——そう、複数が取り囲んでいたのだ。

まず最初に、大佐が一呑みにされた。

別のやつが木元に襲い掛かり、木元はまだ手に持っていた斧を振るってそいつの口元を切り裂いた。他の何かにも当たったようだった——が、気にしている場合じゃない。彼の頭の中でもとりわけ冷静な部分が、白くてでかい狼だとイブカニアを分析する。彼は逃げようと振り返り、囲まれているのを知ると、身を守るように斧を構えた。気狂いのように甲高い声で叫ぶ。

「ま、魔法だ。魔法を使うんだ！」

声は森を貫いたが返事はなかった。木元は無性に苛立ちを覚えて魔女に視線を向けた。魔女は後頭部で両手を組み、地面に臥せっていた。木元は悪態をつきかけて、死の手が首筋を撫でるのを感じ取り、闇雲に斧を振り回す。最初の一振りが、鋭い爪をむき出しにしたイブカニアの前足を切り裂いた。次の一振りは空振りし、その次も同じだった。

ビギナーズラックは長く続かない。油断していた肉食獣どもは、引き攣った顔で凶器を振り回している獲物を観察するように、取り巻く輪を広げた。線でも引いてあるかのように距離を保ったまま、うろつろとしながら様子をうかがう。

鋭くも明瞭な声が怒鳴った。

「木元さん、やめて！ 私に当たる！ 魔法で片付けるから、その場を動かないで！」

木元は聞いたことのない声に驚き、斧が空ぶってばかりなのに気

づき、我に返ったように手を止めた。運動などとは縁がなかったのだ、彼は早くも荒い息を吐き、疲労で今にも倒れそうだった。木元が斧を振るう手を止めると同時に、肉食獣どもが躍りかかってきた。彼は全身の力が抜けるのを感じ、膝が折れ曲がって、地面に坐り込んだ。土下座すれば見逃してもらえるだろうか、という考えがよぎる。もう遅いかもしれない。

肉食獣どもは鋭い牙をむき出しにして、大佐を一呑みにした口を広げ……鼻面にしわを寄せ、金色の月のような瞳で彼を睨み据えている。が、一向にその牙は届かず、前足を振るって切り裂こうとする爪は空を切るばかりだった。木元は股座が濡れていることを、目の前の光景と同様に幻想だと信じ込みながら、呆然と宙に浮いたままの肉食獣どもを見つめていた。

凜と響く声が言った。

「大佐も油断したね。この程度の獣に呑み込まれるなんて」

木元は座り込んだまま、首だけを動かして声の方に顔を向けた。そこに立っていたのは、後ろで栗色の髪をまとめた、聡明な瞳の少女だった。魔女の着ていた黒いローブを身につけているが、フードは下ろしてある。その少女は木元の視線を捉えると、背筋が凍るような冷たい薄ら笑いを浮かべた。

少女が言った。

「あなたが私を後ろから殴ったりしなければ、もっと早く片がついていたのに。大佐も——あっそうだ、大佐のこと忘れてた」

彼女が中指と親指でパチンと音を鳴らす。木元は停止しかけた思考で、何が起るのかとイブ力ニアに目をやった。そこで彼は、肉食獣どもが宙に浮いているのは、木の枝が連中を吊し上げているからだと気づいた。そのうちの一匹を吊るしている無数の枝が動く。枝は獣の身体をからめ捕るように這い、噛み千切ろうとする頭を押さえて、口を大きく開けさせたまま固定した。数本が開いた口から喉の奥へ侵入する。獣は圧倒的な力にあらがおうと狂ったように体を動かしたが、からめ捕った枝は仲間を増やし、その動きを完全に

封じた。

木元は眺めているだけで気分が悪くなってきたものの、目をそばせば別のこと——特に頼りない括約筋の野郎——に気づくので、仕方なく枝の動きを見守った。喉の奥に侵入した枝は、その侵入口をさらに広げながら、奥から胃液に包まれた塊を引きずり出す。枝に包まれたその塊は、地面にゆっくりと下ろされた。繭が解けるように、枝がその包みを開いていく。それは呑み込まれた大佐だった。

大佐は厳しい表情を浮かべたまま、目を開けていた。彼は素早く立ち上がり、何事もなかったように、宙づりにされた肉食獣どもを見上げた。快活な声で言う。

「腹が減っていたんだろうな！ わしを油断させるとは、流石はウィトレイ国で最も恐れられている獣、ということなんだろう！」

彼はフードを目深にかぶった魔女に視線を向けた。

「礼をいうぞ、バベル。助けてもらわなくとも、わしはいずれ自由になっただろうがな」

不明瞭な魔女の声が言った。

「知ってるけど、今回は期限もあるから」

木元は見なくてもその顔が水死体のような仮面をつけていることに気づいていた。だが、彼はわざわざそれを見て確認する。眼をそらしたいことが一つだけあった。そらしたままにしておきたかった。彼は何事もなかったように立ち上がり、被り忘れていた鬘を頭に載せ、革ひもをたすき掛けにして斧を背負う。

「こいつらはこのままにして、出発しよう」

大佐がうなずいて言う。

「そうだな。余計な手間がかかってしまったからな。おまえが漏らしたことなどを気にして、時間をつぶすわけにもいかん」

「私は……」

木元は口を震わせ、顔を真っ赤にした。

「私は漏らしてなど——」

「出発するよ、お漏らしさん」

魔女がリュックを背負い、歩き出す。大佐が先頭に立つため、足を忙しく動かして後に続いた。木元は恥辱にまみれ、怒りで顔を真っ赤にしたまま、突っ立っていた。顔を上げ、宙づりのイブカニアに指を突きつける。

「おまえたちのせいだからな、この、この犬っころども！」

イブカニアが唸り声を上げたが、木元はそれを鼻で笑った。濡れて気持ちの悪い股座を乾かすように、ガニ股で二人の後を追う。宙づりのままの肉食獣どもは、執念深い眼差しを彼に向けていた。

五番山の“五”

山の乾いた風と日差しによって、濡れた下着とズボンはすぐに乾いた。

山？ そう山だ。

迷うことなく森を抜け、三人は踏み固められた山道を進んでいた。日差しは地平線と中天の間にあり、個人的な恨みでもあるかのようにな、灼熱の炎を一行に投げかけている。道端に生えた草は、生まれながらの敗北主義者のようにうなだれている。

魔女も寝不足のためか、ほとんど同じ姿をして歩いていった。大佐はいつものように先頭を歩き、歩幅のために二番手についている木元は……彼をはたから見れば、斧と言う乗り手を乗せたがに股の馬だった。ずり落ちないよう首の後ろまで持つてきた鬘はたてがみのように見え、時々風になびいている。手は地面につかないもののだらりと垂れ、腰はほとんど直角に曲がっている。

木元と魔女はあくびをした。

大佐が振り返って険しい顔を木元の黒い短髪に向けた。

「何だそのザマは！ 股座の臭いでも嗅いでるのか、木元！」

彼は投げやりな返事を返した。

「ああ、そうだ。乾いてるかどうか確かめてたんだ」

「あなたはよっぽど疲れているようですね」

木元は魔女に同じ返事を返した。

「ああ、そうだ。ズボンは、私の喉のように乾いてるぞ」
魔女がため息をついた。

「休憩を取らないと、大佐。この速度だと、夜までにたどり着くかも怪しいよ」

大佐は唸り声を上げた。うなだれた草木が一瞬だがしゃんとしたように見えた。しかし、それは音の過ぎ去る速さで元の姿に戻る。

大佐は二人の様子を改めて見て、大きな手と太い指で先を示した。

「この先に村があった。そこで休憩を取る」

確かに村が、かつてあった。山道を少し外れたところに、山の湧水でできた小川の流れる小さな平地が、そこに広がっていた。村を示す木の立札は残っていて、それには『息を吸い込むような名前ヒイツポ村』と書いてある。かつてはうまい空気を吸って働く村人もいたのだろうが、今は無人の静けさと木造の建物の残骸が、自然の一部と化している。その自然の一部、凱旋門の半分ほどの大きさの大岩には、はつきりとした爪痕が焦げ跡とともに生々しく残っている。

三人は小川のほとりに腰を下ろし、早めの昼食を取った。大佐は自然に感化されたのか、怒鳴り散らすこともなく、物静かに呼吸をしながら食事をした――が、手まで食い尽くしそうな勢いは変わらなかった。魔女もまた、水死体のような仮面を外し、清々しい空気を吸って和んでいた。

木元だけは、そうだったものと縁を切っていた。彼は小川に頭を突っ込んで冷えた水を飲むと、もぎたてのトマトみたいな新鮮さで顔を上げ、生き返った喜びをいびつな顔全体に浮かべる。そして、食事を済ませ、斧を外して寝ところがあった。

鼻水を垂らし、十八歳未満は閲覧禁止と表示されそうなほど恍惚とした表情を浮かべた大佐にも、ロリータ・コンプレックスを抱えた中年の、垂涎の的にでもなりそうな魔女の素顔にも、彼は目もくれず（彼の美德は金持ちか貧乏かでしか差別しないというところにある）廃墟と化した村の残骸を、自慢の眉で皺をつくって見上げた。

「金目のものは残っていないだろうな」

「そもそもが、貧しい村だったから」

「ただ、ここの料理は格別だった」

大佐は言いながら下着一枚になり、準備運動を始めた。

「水浴びですか、大佐？」

「うむ。一緒にどうだ、バベル？」

「そうですね」

「私は遠慮しておく。下賤の者に見せる肌は持ち合わせていないからな」

準備運動を終えた大佐が、下着を脱いで小川に飛び込んだ。水しぶきが上がり、それが治まるころには……彼の姿は消えていた。水音で下流に視線を向けた木元は、水流の勢いか、底の深さか、あるいは両方によつて、流されていく大佐を見つけた。鮭を取る熊が如く、猛烈な速さで腕を振るい、上流に向かって——と言うより、それ以上流されないように——泳いでいる。

「服くらい洗つたらいいのに」

何食わぬ顔で黒いローブを脱いだ魔女が木元に目を向ける。その下には黒い肌着を身につけている。

木元は助けを求めない大佐の頑張りから目をそらし、乾いたズボンに視線を落とした。そして、自問自答する。洗濯したいか？ うん。水浴びしたいか？ うん。脱ぐのは嫌か？ もちろんだ！ そこで彼は起き上がり、ばしゃばしゃ言わせている大佐の二の舞を避けるため、足場を確認しながら一歩また一歩と足を進め、川の中に入つて行つた。

「この村で採れる食材は、水と豊かな土地のおかげで——わっ！ こつちを見ないで！ 馬鹿！ 変態！」

木元は魔女に向けた視線を、腰まで浸かった水面に向けた。川の流れは激しいが、しっかり足をつけていれば、流されることはない。彼は股座の汚れを落とそうと、こすつてみた。落ちたかな？ 落ちただろうな。

彼はズボンと下着をこすりながら言つた。

「“裸とは目に入るものであつて、目に入れるものではない”とは日本人の言葉だ」

彼は手を止めて、無意味にズボンを見つめ、また手を動かしながら続けた。

「私は日本人だから気にならないが、村人がいれば変態の称号をお

まえにあげただろうな。ゴミと一緒に」

「その前にあなたは縛り上げられて川に流されてるから、少しも気にする必要なんてないですよ」

実際、川に流されそうになっている大佐が、気にしてほしそうに、バタ足で盛大な水しぶきを上げた。しかし、顔は峻厳で慈悲の欠片すら求めていない。木元は彼にちらりと目をやって、ようやくバタ足を習得したのか、と思った。なぜ岸に向かって泳がないのだろうか？

魔女は盛大な水しぶきも目に入らなかった様子で言った。

「それに、私はこの村の出身だから、そんな変な称号もゴミも投げつけられたりしないんです」

「日常茶飯事だったというわけか。家がなかったんだな」

「あるよ！……いえ、あった、ですね。もツちエーミツかが現れるまでは」

木元はコモドドラゴンが暴れ、家々を破壊する姿を想像してみた。ああ、あいつはすばしっこいぞ！ 魔法だ、打て！ いや、待て！ 待ってくれえ。俺の家が……。

「なるほどな」

「木元！ バベル！」

大佐が水流に邪魔されながら叫ぶ。

「わしの屍を越えて行け！」

彼は力尽きるというより、自ら泳ぐのをやめたように見えた。峻厳な顔そのままに水に飲まれ、流れて行く。木元の頭の中で、『一人脱落』の文字が浮かんだ。

「あいつ逃げやがったぞ。偉そうにしてたわりに、ドラゴンと対峙するのが怖くなったんだ！ 卑怯者め！」

「ん、大佐のこと？」

魔女の声は、大佐の存在を忘れていたかのように響いた。

「逃げるなんてこと、あの人は考えてないと思うよ。この川はストロンポ街まで続いているから、たぶん向こうで合流するつもりなんだよ」

少し考えて木元は言った。

「その方が楽そうだな」

「行きたいなら、どうぞ。ただ、途中に滝が二、三あるよ。岩もごろごろしてる。大佐でもない、無傷でたどり着くのは難しいかも。私はあの人ほど頑強じゃないから、陸路を行くけど」

「ま、散歩も貴族のたしなみか」

二人は、陽がほんのわずかに傾く間に、服を着、荷物を背負い、ヒイップ村を後にした。木元はずぶ濡れだったので、服が乾くまで不快感とともに無言で歩いた。乾燥した髪は頭の上に乗っかり、いつもの定位置に収まっている。そいつだけは幸せそうだった。

山道は上りから下りに変わりつつあり、穏やかな風が吹き、太陽が昇ってさらに気温が上がった。

彼は魔女に尋ねた。

「山を越えれば、何だって？」

とにかく彼にはそう聞こえたのだ。

魔女はフードから覗く水死体のような顔を彼に向けた。首を心持傾げる。

「何のことですか？」

「山を越えたら、とか何とかいったら？」

「いいえ……ああ、ずいぶん前なら」

「麓があるなり、丘があるなりするんだろ。ドラゴンはそんなに移動したのか？」

「翼があるんです。あれならひとつ飛びですよ」

木元はコモドラゴンを頭の中で描き、翼を付け足した。ま、そうだろうな、と彼は思った。鳥だって翼がある。何も不思議なことではない。渡り鳥サイズなら、山ぐらいひとつ飛びだろう。

「そいつは、今までどこかに隠れてたのか？」

未発見の鳥類もいることだし、その可能性はあるだろ？

魔女は答えた。

「海を渡ってきたのかもしれませんが。あの巨体だから、隠れてても

すぐみつかるでしょうし。翼を広げた姿は空を覆うほどあって、尻尾の一振りは家を粉々に砕くほど。それに、イブカニアの胴ほど巨大な口からは炎を吐くんです。ヒィッポ村に大岩があったのは憶えてるでしょう？」

彼女は尋ねたが、木元が答える前に続けた。

「もツちエーみツかはあれとほとんど同じ大きさなんです。私は少し前に通った場所から見たので断言できます。急いで戻ったけど、村に着いたとき、あれは飛び立った後でした」

木元の思考は、足と同じように停止していた。魔女が彼を追い越し、振り返った。

「あなたを怖気づかせようとしているわけではないんです。もツちエーみツかを見たとき、怯えて混乱してほしくないからいつてるんですよ」

「私が怖気づくものか」

木元は威勢を張ったが、頭ではどうやって逃げようか考えていた。絶望的だ。想像していたコモドラゴンが、ゴジラ並みの大きさになっている。背負っている斧を意識した。これは、やつの爪切りにちょうどいいぞ。

「でも、国王ももツちエーみツか討伐隊を組織してるから、街へ着いたら倒した後だったということもありえますね」

木元は希望を回復させた。

「そういうことなら、私が手を下すまでもなかったということになるな」

「第一大隊は敗北したと聞いています」

魔女は歩きながら言う。

「あなたがやってくる前に、第二大隊を組織中という情報は入りましたが、討伐に向かったかどうかはわかりません」

木元は歩き出していたが、魔女の言葉を聞いて足の速度を落としました。さっさと行けよ、おまえら。

「運がよければ、彼らとともに行けるでしょう」

木元はさらに歩く速度を落としながら、精いっぱいの強がりを見せた。

「足手まといが増えるだけだ」

魔女がまた足を止めて振り返り、彼に仮面の裏から冷たい視線を向ける。大佐以上に強烈で、辺りの気温が下がるような軽蔑の視線だった。冗談じゃない雰囲気の流れてるぞ、と感じた木元は咄嗟に言い訳を考えて口にした。

「ちよつと」

彼はわずかに歩く速度を上げた。

「足を痛めたらしくてな」

「足を、ね」

「歩き通しだったから……」

「足を、ね」

「それに」

足を止め、靴を脱ぎ、逆さに向ける。

「石が入っているらしい」

実際には何も落ちなかったが、彼は大きくうなずいた。

「よし」

靴を履きなおす。

「もう、大丈夫だ」

魔女は何も言わずに前を向き、歩き出した。木元は緊張が去った後の腹立たしさを感じながら、二度と魔女に言い訳などしないぞ、と心に誓って一步を踏み出した。

しかし、街に着くまで彼は一度も魔女の前を歩かなかった。

六番街の“六”

うんざりするほど大勢の人がいる。木元より背の高い女性がいるかと思うと、魔女よりも低い男性もいる。背の低い家々や商店の間に走る道はまるで迷路そのもので、すべてが曲がっている。

二人はその曲線ばかりの街路を歩いていった。陽は中天にかかり、露店からは美味しそうな匂いが漂っている。木元は甘い果実の香りを追い、ごった焼きの匂いを追って、始終顔を動かしていた。彼の鼻の穴はほとんど真正面を向いていて、においや小蠅の侵入を防げないからだ。彼はくしゃみをして蠅を吹き飛ばした。

彼は鼻をこすってから前を歩く魔女に尋ねた。

「宿は？」

大勢の人々に圧倒され、戸惑い、緊張していたため、彼の声は下手くそなバイオリンよりもひどかった。人間のものかどうかも怪しい。

彼女は振り返りもせず答えた。

「宿よりも、大佐を見つけることが先です」

「私はこの忌々しい荷物を置きたいんだ」

「私もそうしたい、です」

彼女は言い、振り返った。仮面で表情は読めない。

「けど、お金はぜんぶ大佐が持つてるから、宿を見つけても――」

「あのハゲが！」

木元は怒りのあまり、口元が震えるのを感じた。

「あんなやつに、どうして金なんか持たせた……いや、あいつは服を脱いだだろ？」

魔女はため息をついた。

「皮袋に入れて、肌身離さず持つてるはずですよ。これは仕方ないことなんです。この国ではそういう決まりだから。街行く人を見て

理解できるでしょう？」

木元は見た。魔女が歩き出したので、その後を追いながらも見た。何も理解できなかった。彼はそのことを告げた。

「姿と態度に注目するんです」

彼はあの一件があつてから、ひどく従順になつていた（だつて、そうだろ？）。そこで彼は言われた通り、姿と態度に注目して観察した。

第一に、背の違いがある。低い者は、大佐やアナフあベータ村の連中と同じで、頬が赤く、髪と肌が黒く、眉毛が異様に太くて、象徴のように鼻水を垂らしている。そいつらは大佐よりも着飾っていない。背の高い者は、木元には見慣れた多種多様な顔立ちの連中だ。肌は黒、白、黄色がいて、髪の色も黒、赤、金色、茶色がある。木元の中で的一般人と同じだ。唯一の違いは、その連中が腰を曲げて歩いているということだった。

第二に——注目しなければわからなかったが——上下関係があるようだ。ほら、露店で買い物をしている二人組を見てみるよ。一人は大佐に毛が生えたようなやつだ。もう一人は腰を曲げても一七〇はありそうな茶髪の男だ。茶髪が品物を受け取る。毛のある大佐が金を出し、茶髪に渡す。茶髪は金を店員に渡す。バケツリレーみたいだ。他のところでも同じような光景が繰り広げられている。

「最初の金の出所は大佐みたいなものからだな」

木元は観察結果を報告し、尋ねた。

「やつらは財布代わりなのか？」

「彼らはほとんど誰も信頼しないんです。主従関係では彼らの方が主ですけど、付き人には決してお金を渡さないんです。幾分昔には付き人にお金を持たせることもあったらしいんだけど、王が変わつて新しい法律が制定されてからは、こういう光景が当たり前なんです。たとえ似た者同士でも、懐を探り合つてるんですよ」

「けど、あのバケツリレーみたいなのは面倒だろ？」

「バケツ？」

「直接店員に払えばいいだろ。信頼してないのなら、一旦付き人に金を渡す理由がわからない」

「ああ、あれは彼らの保身方法です。手違いがあつた時に、責任をなすりつけるための、まあ一種の保険なんです」

木元は目立ってきた店で買い物をする人々を眺めた。信頼していないという割には、息が合ってるな、と彼は思った。毎日やってるんだろうな。市場に近づきつつあるためか、ここが市場だからか。人込みは増え、二人は人垣をかき分けて進まなければならなかった。露店で晒された果実、野菜、民芸品や大佐——大佐？

木元は足を止め——後ろを歩いていたやつがぶつかつた。「いつ——人の行きかう露店の一つに目を向ける。落ち武者ちつくなやつや、泥で遊んだばかりの黒豚みたいなやつらをかき分け、店の前に近づく。間違いない、大佐だ！

彼は振り返り、人込みに消えた魔女に向かって叫んだ。

「大佐を見つけたぞ！」

聞こえたかどうか怪しかつたが、彼は気にせず店に並んだ大佐に視線を戻した。大佐は——数えてみると十数人いるが——揃いの軍服を着て、峻厳な顔つきで、畏にはめられたことに気づきながら斬首されたように、憤りの表情を浮かべている。こうして見ると、と木元は大佐に手を伸ばしながら思った。仁王像と梅干しの合の子みたいだ。

腰を曲げた店員が言った。

「お客さん、それ買うの？ ゼンマイだよ」

ゼンマイ仕掛けなのか、と木元は思つて大佐の肩をつかんだ。泳ぎすぎたんだな。岸に向かわなかったのも、丈夫だったのも、これでうなずける。少し縮んだように見えるが、まあ気のせいだろう。それにしても、どれがあの大佐なんだ？

彼は後ろを覗き込み、ゼンマイネジがないことに気づいた。それを探して、股下から見上げたり、頭上から見下ろしたりしたが、どこにも見当たらない。その瞬間、彼は神がかった英知を感じた。

そして、それに促されるようにして大佐の服を脱がし始める。

黙って観察させていた店員が、慌てたように言った。

「お、お客さん、いったい何をするつもりなんですか」

木元は手を休めずに答えた。

「ネジを突っ込む場所を探してるんだ。あるいは、そのネジをな」

店員は木元の腕をつかんで——「私に気安く触れるな！」と木元は叫んだ——大佐とその服から離れた。

「何を突っ込む気が知りませんが、商品にそんなことされちゃ困ります！　どんな趣味があるにせよ、買ってからにしてください」

木元は苦虫を噛み潰したような表情で、店員と大佐を交互に見やっただ。本人には直接聞けない、と彼は考える。だが、どうにかしてあの大佐を見つけ出さなければ、今夜もまた野宿ということになる。畜生め！

彼は店員に言った。

「一つ聞こう。どれが川から拾った大佐だ？」

「はあ？」

「あちこちで回収したことは分かっている。そのうち、どれを川で回収したんだ？」

「どれがって——」

「それは大佐じゃないですよ」

やってきた魔女が店員を遮った。木元は振り返って魔女に目を向けてから、整列している大佐に視線を戻した。どう見ても、あの大佐だ。確かに、ちよつと縮んでいるが。

「第一、動いてないし——」

「それはゼンマイ仕掛けだからだ」

「——服を着てます。ゼンマイというのは、これの値段のことですよ？」

木元はその言葉を聞いた。理解しようと努め、店員に視線を向ける。店員はうなずきを繰り返していた。だが、木元に閃きは訪れず、首を傾げて大佐に目をやる。頭の中で何度か魔女の言葉を反復し、

二十回目でようやくぼやけた輪郭をつかんだ。

大佐を覗き込んでいた魔女は笑い声で言った。

「確かに似てるけど、本物はどこかを歩いてるはずだよ」

木元には納得がいかなかった。

「じゃ、じゃあ動かないのか？」

うなずき続けている店員を無視して、魔女に尋ねる。

「本当にこれは大佐じゃないのか？」

突然、店員の頭の動きが止まった。

「お客さん、こいつはめどーめさといって、魔よけなんですよ」

店員は魔よけのツルツパゲた頭を撫でて続ける。

「最近だと徴兵やもツちエーみツかとかで街の皆は不安を感じてるんです。刺激して襲来してこないのか、本当はどこかの国に戦争を吹っ掛けるつもりなんじゃないか、どこかの酒場にでも入れば、この話題で持ちきりですよ。そこで、こいつなんです」

ツルツパゲた頭をパシツと叩く。

「大昔の話ですが、この大陸が浸かるほど雨の降り続いた時期があったそうなんです。空は真っ暗闇になり、家は流され、日が射さないので作物は育たない。人々は祈ったが、願いは届かなかった。そして、ついに地面が解け始めたんです」

店員は話し慣れているのか、雰囲気づくりに声を潜めたり、張り上げたりした。

「大きな大陸も解けて小さくなり、辺りは水で一杯になった。人々は絶望し、上を見るのも下を見るのも嫌になって目を閉じました。しかし、あるとき空に一筋の光が差し込んだんです。人々は目を開け、その希望の光を見上げました。そこに浮かんでいたのが、この顔です！」

店員が両腕で魔よけを掲げたので、木元は見上げてその顔を見た。この顔が浮かんでいたのか、と彼は思った。人々は新たな天災だと思っただろうな。

「そして、その一条の光に乗って、こいつが降りてきたんですよ」

店員はその様子を表現するため、ゆつくりと魔よけを店台に下ろす。

「人々は駆け寄った。彼こそがこの悪夢を振り払ってくれる人物だとわかっていたんですね。彼は集まった人から鍬を一つ借り、それで耕し始めたんです。彼が一振りすることに風が吹き、その風は暗闇を薙ぎ払った。鍬が地面を打つごとに揺れ、地は固まった。そして、彼が耕した田には実をぎっしりとつけた野菜が、果物が育ったといわれています。それ以来、こいつはめど→めさと呼ばれているんです」

木元は人形を見つめて言った。

「救世主みたいなものか。そんなこと、長々と話されてもな」

魔女が店員に尋ねる。

「私たちはこの魔よけに似た人を探してるんです。もっちエ←みツかを倒すために。見かけませんでしたか？」

店員はめど→めさの峻厳な顔つきを眺め、呟いて首を振った。魔女に視線を戻す。

「人探しなら、ば・ろで聞いてみた方がいいですね。あっちの——」
奇妙に曲がった通りの外れを指差す。

「——酒場がごろごろしてる通りですよ。薄汚いところなんで、普通の人は近づかないんですけどね。しかし、もっちエ←みツかを倒す、ねえ」

魔女は続けて尋ねた。

「第二大隊は出発しましたか？」

「本当ならもう出発してるはずなんですけど、ちよつとごたごたがあつたらしくて、次に明るくなつてからということになったんです」
木元は“ちよつとごたごた”を想像してみた。朝日を受けて、見事に整列した大隊がどこか広いところに集まっている。よく見ると、整列した中に一人、左へ半歩だけずれたやつがいる。大隊長が指さして叫んだ。

「おまえ、半歩ずれてるぞ！」

ずれたやつの一つ後ろが、ずれたやつに合わせて半歩左へ寄った。
大隊長が叫ぶ。

「おまえじゃない、その前だ！」

今度はその前のやつが右に半歩寄った。

「よし。おまえも合わせろ！」

大隊長が叫ぶと、左へ半歩出たやつのもう一つ後ろが、左へ半歩合わせた。
また大隊長が叫び……いつの間にか受けている日差しは夕暮れのものになっていた。大隊長は半歩出たやつ（まだいた）に叫びかけて止め、空を見上げて別のことを言った。

「よし。暗くなりそうだから、出発は明日に延期だ！」

「能無しどもだな」

木元は大隊から帰ってきて言った。

「明日も出発しないかもしれないぞ、たぶん雨とかで」

「今夜の私たちは野宿ですよ。大佐が見つからなきゃね」

二人は店員の指差した、ば・ろと呼ばれる街路へ向かった。

七番出合いの“七”

木元は斧を両手でつかみ、高く振り上げた。数名の通行人が彼に驚き、その視線を塞がないようさつと道を開けた——彼はそれに目もくれなかった。夕暮れの中、殺意のこもった視線は通りの真ん中を堂々と歩いている三人に向いている。いや、そのさらに真ん中だ。彼は三人の真ん中に向かって怒鳴り、走り出した。

「この腐れハゲええ！」

少し前でその三人に向かって手を振っていた魔女の横を通り抜ける。疲れは吹き飛んだように見え、鬘は実際に吹き飛んだ。彼は走り、振り上げていた斧を、目標に向けて振り下ろした——それが地面に突き刺さった瞬間、彼は目測を誤ったと気づいた。

峻厳な顔つきで、身動きも瞬きもせず見つめていた三人の真ん中は、怒鳴るように言った。

「感動の再会というところだな、木元！ おまえが戦士だということとは分かった！ だが、その斧はもツチエ←みツかに向けるものだ。わしじゃないぞ！」

ちよつと前。

ば・ろの酒場や街路で聞き込みを行った木元と魔女は、この町一番の宿にそういうのがいたという情報を仕入れた。魔女が安堵の息とともに言う。

「よかったあ、大佐を見つけても部屋が埋まってたらどうしようもないもんね」

木元は言った。

「最初から宿に向かってればよかったんだ」

彼は魔女の幸福感に水を差したと気づいて、素早く話題を変える。「ドラゴンの情報を手に入れたと知ったら、あいつは驚くだろう」

ロウソクの炎が揺らいで消えそうになる、そんな沈黙が流れた。
「そうですね」という魔女の言葉で、木元は額に浮かんでいた汗をぬぐった。

二人はこの町一番の宿まで行くと、その豪華な宿の入り口から続く人の列に目を奪われた。木元は行列のできた料理店や握手会を見たことがある。しかし、行列のできる宿というのはこれが初めてだった――ま、部屋は大佐が取っているから並ぶ必要はないんだが。

彼は列の最後尾に並ぼうとした魔女の袖を引っ張って、横入りを警戒する鋭い視線を浴びながら、この町一番の宿に入った。もちろん列は中まで続いていて、カウンターが折り返し地点になっている。もう一つ別のコースをたどる連中もいて、そいつらはカウンターの手前で閻魔帳のような帳面を持った従業員に話しかけている。木元はその従業員に手を振った。そいつは罪人を見るような目で彼を見返し、近づいてきた。

「満室です」

それだけ言って戻ろうとしたので、木元は慌てて声をかけた。

「違うんだ」

「満室ですよ」

そいつは木元を見て言い、不安げな様子で帳面を開いた。充分な時間を使って確認を済ませる。

「違いますよ」

「大佐という名前で部屋を取っているはずだ」

木元の言葉に魔女が重なる。

「あるいは魔女がバベルか木元で取っているかもしれません」

従業員が帳面をのぞく。列から一人、別のやつがコースを外れてやってきた。すっぱそうな顔をしていて、鼻と唇の接点が音を奏でている。

すっぱそうな顔が舐めるような声で言った。

「おれは仙台の人偏つていうんじゃないけどやあ」

従業員が帳面に目を通しながら言う。

「満室です」

「うん、知つとるよ」

従業員は顔を上げずに言う。

「カウンターで予約を取ってください」

「いや、違うし」

仙台の人偏はしつこかった。

「おれ、ここで働きよんじゃけど、なんか暇じゃけん話しかけて――」

従業員の強烈な右フックが飛び、仙台の人偏は半回転しながらあおむけに倒れ、沈黙した。新しいコースを発見した連中が、やつてこようとした足を止め、見なかったふりを必死で装う。呆気にとられていた木元と魔女を余所に、従業員は首を振った。

「そういった名前は見つかりませんね」

木元はその帳面を見ようと近づいて言った。

「そんなはずはない。絶対にあるはずだ。大佐だぞ！身長はこのぐらいで、頭が禿げ上がっていて、真っ黒い顔に鼻水を垂らしてるんだ」

「木元さん」

魔女がカウンターを指差した。

「あれを見てください」

木元は指先から出た目には見えない線を追い、「大佐！」と声を上げてかけて気づいた。そいつはあの店先に並んでいた、忌々しいゼンマイ価格のめどめさだった。

そして今、木元は振り上げるために地面に突き刺さった斧を引き抜こうとしている。斧はびくともしない。このハゲに一発食らわしてやらなきゃ気が済まないのに、と彼は全身に力を込めながら思った。こんちきしょう！こいつはフンドシみたいにしっかり食い込んでやがる！

「無理ですよ」

魔女が後ろから言った。

「大地が銜え込んでるんですから」

三人の真ん中は魔女に目を向け、両端の二人に金（錆びた鉄の塊に見える何か）を渡した。二人はちっぽけな布のどこか、あるいは隠しきれていないふくよかな肉体のどこかにそれを仕舞い込み、禿げ頭にキスマークを残して立ち去る。三人の真ん中——つまり、大佐——はいかめしい表情を崩さずに二人を見送ると、まだ必死に斧を引き抜こうとしている木元に目をやった。

峻厳な顔つきで、壊れたラジオのように、同じ怒鳴り声で大佐は繰り返した。

「感動の再会というところだな、木元！ おまえはやはり戦士だったわけだ！」

「宿はすべて埋まってきましたよ、大佐」

魔女の言葉は静かで、その声には大佐の鉄の心臓を貫く鋭い棘がついている。

「どうするつもりですか？」

大佐は唸った。真剣に受け止めて考えているかのように腕を組み、もう一度大きく唸る。木元は魔女に目を向けて、自分の役目は傍観者になることだと思った。自分の怒りなど、彼女のに比べればマツチの火と火炎放射器ほど違う。

木元は彼女の冷たい視線を浴びないよう斧から手を離し、鬘を取りに行つて被る。振り返ると二人はこう着状態を続けていたので、注意をひきつけないよう動きを最小限に抑えながら斧の位置まで戻った。

斧に手を乗せる前から、急激な気温上昇が熱波を大佐から感じていた。黒い物体は水を含んだ雑巾を絞ったように汗を流している。その熱波のためか汗は蒸気となって、大佐の身体にまとわりつき、地面に流れた分は染みとなって広がり続けている。

木元はその現象に魅せられて、無意識に緊張の抜けた手で斧に触れた。フンドシみたいに食い込んでいた斧が簡単に動いたので、彼

はそちらに意識を向け、今度は両手で僅かに力を込める。斧は軽く地面から抜けた。彼は魔女の視線に気づき——一瞬、身体を震わせてから——意図をくみ取り、うなずいてそのまま斧を持っていた。魔女がもう一度尋ねる。

「どうするつもりですか、大佐」

大佐はほとんど発光しそうな勢いで熱波を放出していた。その峻厳な顔は赤黒く変わり、白いタンクトップと荒い生地の手拭と白いロングボックスが多量の汗をふくんで黒っぽくなっている。蒸発も発汗量には追いつかないらしい。

大佐は言った。

「その点は問題ない」

その声は熱波が何かで奇妙に聞き取りづらかった。

「わしにはちよつとした知り合いがいる。なかなかの男だ。泊めてもらえるだろう」

魔女が黙っていたので、木元も黙って髪を直しながら続きを待った。大佐の放射は続いた。

「いや、額をこすりつけてでも頼んでみよう」

大佐は言ったが、その顔は万策尽きたという表情を浮かべていた。「その男に、最高の部屋を用意してもらおう——食事も見合つたものをな。二人ともきつと気に入るはずだ」

魔女が静かに言った。

「そうなると、いいですね」

大佐はうなずいた。

「うむ」

危機を一時凌いだためか、彼の身体から放射される熱は収まり、汗は十リットルほど流れた後で止まった。

「そうならなければ、わしは死ぬと脅してみよう」

大佐は冗談のように笑い声を上げたが、笑みは奇妙に強張っていた。

静かになると魔女が言った。

「脅して済めばいいですね」

「そうだな！」

大佐は大声でうなずき、それで恐怖が去らなかったのか、さらに大声で続ける。

「本当にわしは死ぬ羽目になるかもしれん」

可哀想に、と木元はめつたに覚えない同情を大佐に感じた。本気で怯えてやがる。あの人形より縮んで見えるほどだ。一緒に笑って冗談にしてやろうか？

魔女はそんな感情を持ち合わせていないようだった。クスリとも笑わず、彼女は言う。

「本当に、死ぬかもしれませんね」

木元は大佐が控えめな笑みを浮かべるのを眺めていた。そして彼は、どうやら斧を使う必要がないとわかると、革ひもをたすき掛けにしてそれを背負う。大佐が命運をかけた男のように威厳を保って向きを変え、首の後ろに留めていた麦わら帽子を頭に被った。虫取り網と虫かごがあれば、と木元は大佐と魔女の後に続きながら思った。海から山に帰ってきた少年に見えなくもないな。

道はきれいで石が敷き詰めてあり、ずっと先まで続いている。自信のある足取りで進む虫取り少年版大佐の後ろを、疲れ切った二人は無言でついて行っていた。街はさらに後方で、夜の帳に構えて準備をしている。

木元は魔女に尋ねた。

「ヴエブリチって何のことだ？」

魔女は彼に顔を向けただけで、答えなかった。彼は続けた。

「私は明日一日でドラゴンを倒し、村まで戻らなきゃならない。期限は三日だと知っている。だが、村長はヴエブリチまでに戻ってこいといった。私にはそれが理解できない」

虫取り少年版大佐が言った。

「勉強が足らんな、木元！ ヴエブリチとはヴエブリチするという

ことだ！ アナフあべータ村はそれによって再生される！」

木元は眉間にしわを寄せ、アホな少年にしか見えない大佐を見つめ、その言葉を理解しようと努めた。よくわからなかった。彼は聞きなおした。

「えっ？」

「こういう話がある」

大佐が突然始めた。

「わかるやつには話す必要はない。わからないやつには話しても仕方がない」

「なるほど」

木元は半分納得して別の疑問をぶつけた。

「間に合わなかったら、私はどうなる？」

大佐が足を止めた。

「非常に残念だが、死んでもらうしかない」

「じょうだ——」と木元は笑いながら言いかけ、魔女のうなずきを見て口を閉じた。彼の頭の中で様々なことが巡り、螺旋を描いて大佐の憤りに落ち着く。復讐だな、と彼は憤慨して思った。私に八つ当たりするなど、お門違いもいいとこだぞ！

「そこるところを、しっかり説明してくれ」

大佐が苛々しながら口を開こうとしたとき、魔女が手を上げてそれを制した。瞬時に大佐は口を閉じる。彼女は言った。

「木元さんはこの世界では異質の存在です」

それはほとんど彼の鬢に向けて言っているようだった。

「ヴエブリチまでに戻れなければ、あなたが元の世界へ帰る見込みはありません。けど、この世界にも置いておけない。そういう事情なんです」

大佐が後ろ頭で話すように、先頭を歩きながら言った。

「以前、政策を通す段階で、過半数にあと一人足りないという事態が起こったことがある。そこで村長はサドルだか何だかいうやつを呼び出した。そいつはストロンポ街に向かい、投票に参加した。賛

成に入れるはずだったし、やつはそうした。が、残念なことに投票が長引いたせいで、やつはアナフあべータ村に戻ってくるのが遅れたんだ。そいつは今も、村の墓場で眠っている」

木元は呆然として立ち止まった。彼が口を開いたとき、その声は奇妙にかすれ、意外と男らしく聞こえた。

「まともじゃない。それに、それに無責任だ！」

小さくなっていく麦わら帽子が言った。

「だが、間に合わなければおまえはそうなる。そうする他がないことは皆が知っている」

木元は甲高い声を出した。

「私は帰る！ 私は帰るぞ！ 今からだ！ ドラゴンなど知ったことか！」

足を止めていた魔女がゆっくりと、穏やかに言う。

「前に進む以外、道はないんですよ、木元さん」

諭すような口調だ。

「村に戻ったからといって、村民があなたを帰してくれると本当に思ってるんですか？」

「魔女だ！」

木元は魔女を指差した。その指は怒りで震えていた。

「おまえなら私を元の世界に戻せるはずだ！ そうなんだろう？」

「ヴエブリチまで間がありますよ。それが始まるまで、あなたを戻すことはできません。村に帰る時の方法は考えてありますか、大佐？」

大佐は二人よりおよそ二十メートルは先に進んでいた。彼は振り返ったとき、はじめてそのことに気づいたようだった。しかし、引き返すことは彼の主義に反するのか、その場所で短く言った。

「いや」

その声は二人の耳まで届かなかった。

「色々な方法があるんです。筒を目標に向けて飛ばしたり――」
「私は粉々だ」

「――籠という方法もあります。木に括り付けて弾き飛ばすんです」
「三人ともな。大佐をクッションに使えば、無事にたどり着けるかもしれない」

魔女はうなずいたが、あまり気乗りしない様子だった。そして、話題を避けるように小さくなった大佐を指差した。

「今は休むことだけを考えましょう」

歩き出しながら魔女は言った。

「大佐がそのときに使える状態かどうか、まだわかりませんから」

「ドラゴンには山にいるとかいってたな」

「そんなに遠くないといいですね」

木元はドラゴンに乗ることを考えていた。歩き出しながら、ドラゴンに乗る自分の姿を想像した。いいぞ！　まずは村の連中を震え上がらせてからだ。

八番城の“八”

その建物の前に来ると、大佐が大きな手を振った。

「ここだ」

木元はそれを見上げた。

「私の城にふさわしいな」

彼の城にふさわしいかどうかは別として、確かに城と呼ばれるにはふさわしかった。というより、孤立した城だった。薄闇の中で見ると、山を背景にしたその形は、コウモリの住処といってもよさそうだ。城壁に沿って監視塔がいくつもあり、城門前にも遮蔽物の役割を果たしているような馬蹄型の塀と一緒に一つある。そこから五人の兵士が降りてきて、三人の前に立ち塞がった。五人とも大柄で、それぞれ武装している。

一番目の兵士が言った。

「こんな時間に何用だ」

二番目の兵士。

「怪しいやつらめ」

三番目の兵士。

「よくもゲームの邪魔をしてくれたな。がっばり稼げたのによ」

一番目の兵士が三番目に言った。

「いや、それはどうか。俺はおまえの手を見透かしてたからな」

四番目の兵士が言う。

「ちよつと待てよ。予約があつたんじゃないのか？」

一番目の兵士は四番目に聞き返した。

「えっ？」

二番目の兵士。

「あつた気がするな。ベルマンさんとこの甥っ子が、塔の最上階で手品を見せてくれるはずだ」

三番目が言った。

「それはずいぶん昔だよ。俺が負けてた頃の話だ」
四番目が三番目に言う。

「いつも負けてるじゃないか」
そして大佐に目をやった。

「あんだ、ベルマンさんとの甥っ子か何かか？」

大佐は両手をいっぱい振って怒鳴った。

「弛んどる！」

五人はそれぞれの装備を確かめ、弛みがないことを確認した。
四番目が言った。

「弛んでないじゃないか」

彼は仲間に向いた。

「弛んでないよ、な？」

「こいつらに喋らせたら——」と五番目は言いかけたが遮られた。
三番目だった。

「タルンドルさんのとこの甥っ子じゃないか？」

彼は自分の可能性が受け入れられたかどうか、期待の目で仲間を見回した。そして言う。

「タルンドルさんとの甥っ子は、手品をしないけどな」

「手品じゃないとすると、あれじゃないか？」

四人は興味のある眼差しを一番目に向けた。一番目はそれを発明したかのように誇らしく言った。

「晩餐会だ」

三番目が同意するようにうなずいた。

「晩餐会か」

大佐に目をやる。

「晩餐会か？」

大佐は憤りの雄たけびをあげかけた。が、魔女が先手を打った。
「そうです。私たち招待されたんです」

五人の兵士はお互いにうなずき合い、後の会話をテレパシーで行

った。三番目のやつが門まで危なげな走りで近づき、大声で叫ぶ。

「門を開ける！」

「何でだ？」と疑問が返ってきた。

「晩餐会のお客が到着だ」

三番目のやつはさらに叫んだ。

「こんなところで待たせる気かよ」

「晩餐会なんて聞いてないぞ」と声が返ってきた。

「今聞いたろ」

三番目は負けなかった。

「開けるよ！ 職務怠慢だぞ！」

「へん、どっちが職務怠慢だつて？」

「ふん、俺たちはしっかり見張ってるぞ！」

それには返す言葉もなかったらしい。しぶしぶと門が開き始めた。五番目が三人のエスコート役になり、仕事を終えた他の兵士は監視塔に戻って行く。

「さ、こちらへ」

三人は五番目の後について行った。城門の中に入るとき、木元は堅牢な塀や監視塔を振り返って誰にともなく尋ねた。

「監視の意味はあるのか？」

三人は五番目に連れられて城の中に入り、大広間を抜け、いくつもの廊下と階段を通って、一つの部屋に入る。五番目は扉の前に来るといつもノックをしていたが、今まで返事がなかったので、その部屋の扉はノックしなかった。彼はその部屋に入り、後の三人が続こうとすると、押しのけながら戻ってきた。

彼は信じられないように言う。

「王様がいた」

後ろ手で扉を閉め、咳払いをし、今度は慎重にノックする。返事はなかった。五番目は当惑したように三人を振り返った。

「見間違えたのかもしれない」

五番目は扉を小さく開け、その隙間から中を覗きこむ。そして、扉を閉めた。閉めた扉にうなずく。もう一度、今度は大きくノックした。

「いったい何事だ？」と声が返ってきた。

五番目は畏まって答えた。

「お客様です。晩餐会の」

「晩餐会？」

五番目は声を聞き、三人に続くよう合図をしてから、扉を開けた。一步踏み込んで脇に寄り、手で三人を示す。

「こちらのお三方です」

そこは食堂のようだった。長いテーブルが白いクロスをかけて中央に鎮座し、左手側は窓でカーテンがかかっている。右手側には二つの扉、その二つ扉の間に暖炉がある。三人と五番目が入ってきたのは下座の方だったらしく、上座には王様とわかる大佐とかと大差ない顔立ちの男が座っている。

木元はそいつを予測していた。しかし、浮き出たような白髭と薄汚れた石の王冠、灰色のマントが醸し出す石像的な雰囲気だけは予想外だった。真つ黒い顔さえなければ、石像が椅子に腰かけているように見えただろう。

「誰だそいつらは」とそいつが尋ねた。

五番目はしゃちほこばって答えた。

「タルンドルさんとこの甥っ子です。晩餐会の招待客ですよ」

大佐が麦わら帽子を後ろにやって一歩前に出た。木元にはその頭に槍が突き刺さったように見えた。槍を突き出した五番目が厳しい表情で言う。

「勝手に前に出るな」

「わしは大佐だ。王様とは顔なじみでもある」

五番目は槍を下げたが、表情には困惑が浮かんでいた。背筋を伸ばした姿勢で、空気中に浮かんだ回答を探そうと、眼球運動だけであちこちを見つめる。バカなんだな、こいつは、と木元は思った。

王様が言った。

「おお、大佐か」

しかし、いきなり立ち上がることはしなかった。後ろで控えている背の高い男に指示し、そいつが椅子を引くまで待つ。椅子が動き、着地場所が開けると、ようやく生意気な子供のように飛び降りて地に足をつけた。

「お久しぶりですな、王様」

大佐がそう言って、近づいてきた王様と固すぎる握手を交わした。

「チョウチヨの戦い以来ですかな？」

「まさしく」

小さな王様は言ったが、手は握ったままだった。

「君はてつきり討死をしたのかと思っていたぞ」

大佐の腕の筋肉が盛り上がり、それにつれて王様の腕も迫力を増した。

「ハハハ、ご冗談を」

「冗談なものか」

「わしが不死身なことは身をもって知っておられるではありませんか」

「溺れ死にぐらいはすると思っていたのだ」

二人は笑い声を上げながら力比べを続けた。魔女が咳払いすると、大佐は素早く王様の手から逃れ、木元と魔女を反対の手で示す。

「この二人はわしの仲間で、もツちエ←みツか討伐を目的としている戦士たちです」

木元を指し、「木元」

魔女を指し、「魔女のバベル」

王様は無愛想な笑みを浮かべてうなずいた。今まで回答を探していた五番目が言った。

「ちよつと待つてください」

大佐に視線を向ける。

「タルンドルさんとこの甥っ子じゃないのか？」

大佐は答えた。

「わしは大佐だ」

五番目は視線を木元に向けた。木元は答えた。

「私は木元菊だ。貴族の位だぞ」

次に視線を魔女に向けると、彼女は首を横に振って答えた。五番目はぶつぶつとつぶやきながら考え、うなずき、結論に達したように頭を上げた。そして叫ぶ。

「侵入者だ！ 賊が侵入したぞ！」

五番目が構えようとして出した槍に、大佐は素早く反応した。後ろに飛んで、その初撃でもなんでもない動きを避け、上体を反らしすぎたためか、着地に失敗して尻もちをつく。

魔女が五番目に言った。

「大佐は王様の知り合いなんです」

五番目は王様の盾となるような位置に立ち、槍を構えたまま肩越しに振り返った。

王様はうろたえていた。

「侵入者か？ どこだ？」

五番目は教えるように言った。

「王様、たぶらかされてはなりません。こいつらは我々を騙して侵入し、王の命を狙うやからです。私が気付かなければ、危ないところでした！」

「私は晩餐会に招待されたんだ」と木元は言ったが、何か間違っている気がした。

五番目はうろたえたままの王様にさらに説明した。

「晩餐会は偽りです。タルンドルさんの甥っ子と名乗ったのに、この中にはタルンドルさんの甥っ子はいないんですからね」

「何てことだ」

王様は言ったが、うろたえは混乱に変わっていた。

「タルンドルさんなど知らんぞ」

「そういうことです！」

右側にある二つの扉から、武装した兵士が幾人も突入してくる。

そいつらは扉を破壊し、ついでにテーブルにぶち当たり、食器や料理をひっくり返し、椅子に躓きながら大きな半円を作った。

魔女が怒鳴る。

「大佐、説明してください」

大佐は起き上がろうとしていた。落ち着いたものだった。ゆつくり立ち上がり、ついてもいない埃を払い、囲んでいる兵士たちを見回す。大佐は説明した。

「わしは大佐だ」

そして大声で叫ぶ。

「食事と部屋を用意しろ！ でなければ、わしは死ぬことになる」

兵士たちは半円を縮めた。木元は斧に手を伸ばすべきかためらいながら、後ろの扉を開け……重たい鎧に手間取りながらやってくる兵士の群れを見て閉じる。魔女がその仮面を向けてきたので、彼は首を振ってそのことを伝えた。

兵士の鎧と体に押しつぶされそうになっていた王様が、助けを求めるとような声で叫んだ。

「何とかしてくれえ！ 死んでしまっ！」

兵士たちはその叫びでさらに半円を縮めた。王様の声が止んだ。

大佐は大手を振りながら、同じ説明を繰り返す。が、兵士たちは聞く耳を持っていないようだった。

「一旦、退却しましょう、大佐」

「いや、わしは死ねん！」

大佐はそう言いながら兵士たちに突進して行った。不意を突かれた兵士の数人が引き、仲間にぶち当たり、転がる。大佐はなおも進み、テーブルの上に飛び上がると、兵士たちを振り返って土下座した。

「頼む！ 食事と部屋の用意をしてくれ！」

木元はそれを見ていなかった。魔女が首を振ったので、かついでいた斧を手に持ち、振り回しながら窓の方へ走る。大佐の行動に注

意を奪われていた兵士たちは、彼の攻撃を避けながらもバランスを崩し、道を開けた。二人は窓にたどり着き、木元が斧を振るって留め金を壊す。その先はバルコニーに続いていた。バルコニーに出た二人は窓を閉め、半円形の手すりから下を覗いた。

後ろでは大佐の怒鳴り声と兵士たちの怒鳴り声が響いている。大佐の方が大きかった。

「賊が外に――」

「部屋と食事の準備だ！」

「こいつが首謀者かも――」

「頼む！ 用意してくれなければ、わしは死ぬことになるんだ！」

木元は三階分の高さから下を見つめていた。王様は身長割に大きな城を建てていたので、それは確かに三階分はある。彼は窓の方を見ている魔女に言った。

「駄目だ。飛び降りれば死ぬぞ」

窓が弾け飛ぶように開いて、兵士たちがバルコニーにやってきた。そいつらはかなり苛立っているように見えた。それぞれの持つ武器を試せるチャンスがやってきたかのように、目を光らせ、口には危ない笑みを浮かべている。

木元は言った。

「私は貴族だぞ」

やはり何かが間違っているような気がした。でも止められない。

「礼儀を知れ！」

「くたばれ、化け物！」

兵士の必殺の突きが、木元を貫く――いや、彼のいた場所を貫いた。本当の彼は兵士たちの頭上に浮かび、斧を構えたまま困惑していた。化け物と呼ばれたこともあるが、浮いていることにも同程度の困惑を感じていた。

「空を、飛ぶのか」

兵士たちからざわめきが漏れた。

「信じられない」

感覚が追いついたとき、木元は胸に圧迫感があるのを意識していた。身体がバルコニーの上空から離れ、漂いながら地面に着陸したとき、彼の天才的なひらめきは『魔法』という言葉で頭を浮かべる。彼は口に出して言った。

「魔法か」

頭上では兵士たちが指さし、叫び、武器を投げていた。魔女が剣や槍を避けながら木元の袖を引く。

「ぼんやりしている暇はありません。逃げましょう」

木元はそうする方が賢明だと悟った。そこで、彼は魔女の後について暗闇の中を走り抜けて行った。

九番洞窟の“九”

木元は傾斜を速足で抜け、洞窟の明かりを目にすると、そちらに近づいて石を投げ込んだ。その石が飛び出してくると、素早くそれを回避してから、洞窟の中に入った。

彼は言った。

「連中は山狩りを始めたぞ」

靴の裏をきれいにしながら言葉を続ける。

「私に石が当たるところだった」

魔女は仮面を外した状態で胡坐をかき、火の向こう側に座っていた。食料品を詰めたりユツクからいくつかの品を取り出し、鉢で何かを混ぜているようだった。彼女は少し目を上げて、礼儀上の謝罪をした。

「すみません」

木元はうなずいて、洞窟の出入り口を右に見る位置で魔女と同じように座った。斧は偵察中に邪魔になるだけだということで、壁に沿わせて置いたままだった。鬘も同じ理由で、斧の頭に被せてある。まだ夜は開けていない。

二人がこの洞窟を見つけたのは偶然だった。

城を抜け出し、ストロンポ街に向かっていた二人は、そちらにも手が回ることを考えた——いや、二人ではなく魔女の方がだ。そこで回れ右をし、城の裏手にある山に向かった。城の横を通るので大きく迂回しなければならなかったが、その明かりを見た限りでは、連中はまだ城内を探しているようだった。あるいは、大佐が活躍していたのかもしれない。

城を迂回した二人は山に入り、魔女の魔法で木の頂上から一休みできそうな場所を探した——主に木元が。そして、少し山を登ったところにある洞窟、この洞窟を偶然という名の努力の結晶で見つけ

ただ。魔女が火を起こしている間に、木元は休みたかったが、視線が厳しいので偵察に出かけた。戻ってきたときの合図を決め、彼は斧と鬘を置いて城に向かった。そして、いくつかの明かりが山に向かつて来るのを目撃したわけだ。

今、彼はなぜ連中がそうも早く山に向かうことになったのか、それを考えている。

魔女が言った。

「私たちが山に向かうところを見た兵士がいたのかもね」

木元は絶対の核心を込めてうなずいた。

「それだ。間違いない」

「あるいは、大佐が説得したのかも」

彼は素早く意見を翻した。

「そうだな。間違いなくそうだ」

魔女が視線を上げ、何も言わずに鉢に落とした。木元はちょっと怖くなった。火を見つめ、斧を振り返り、手近に引き寄せる。こいつは……重たいだけだ、と彼は思った。貴族なら細身の剣がいい。それなら、もっと活躍できただろう。明日のドラゴン退治も――。

「これはもう、ドラゴン退治とかやってる場合ではないな」

「それ！」

魔女が興奮に瞳を輝かせながら木元を見つめた。

「もツちエ←みツかを倒せば、私たちの疑惑が晴れますよ！ きつとそう！」

「ここを離れるのはやぶさかではないが。ドラゴンがどこにいるのかも知らない、私たちは追われる身で二人しかいない、それなのに倒そうだなんて無茶もいいところだろ」

魔女がうつむいて鉢の中の代物を混ぜる作業に戻った。火にくべた薪が爆ぜ、小さな火花が散った。木元はそれを見つめ、はじめて元の世界のことを考えた。携帯電話やゲームやテレビと離れてみると、時代遅れになっていく自分が認識できる。最新版を追っかけ、その情報に遅れまいと走り続けていた頃が遠い昔のように感じた。

静かになると、色々なことを考えるものだ、とぼんやり思った。碌でもない過去を思い出すのは気に食わないが、じい様ばあ様になつて「あの頃は……」などつぶやくよりは、今整理しておいた方がいいんじゃないか？

だが、本当に気に食わなかったので止めた。

魔女が鉢の中を混ぜながら言つた。

「大佐を助け出せば、もしかしたら……」

木元は首を横に振つた。あいつの実力は十分に分かっている。餌としてしか使えないやつだ。それにこいつも、魔法使いといいながら木を操つてるところしか見たことがない。ドラゴンが火を吹くんだ。木なんか役に立たないだろう。あるいは——彼は魔女の練っている鉢の中の代物を指差した。

「あるいは、それが役に立つかもしれないな」

「これ？」

「毒薬だろ、それ」

鉢の中の代物は確かにそう見えた。

「ドラゴンも内側からのダメージには対処できないかもしれない」

「これは毒薬じゃないよ」

毒薬じゃないのか。

木元は薬草を想像しながら尋ねた。

「じゃあ、何を練つてるんだ？」

魔女が躊躇いがちに、ちよつと照れたような笑みを浮かべて答えた。

「こうしてると、気が休まるんです。それにほら、これに塗つて食べてもいいですし」

彼女はリュックからパン——木元はそう思っていた——を取り出し、鉢の中に突っ込んだ。そしてかき混ぜ、しっかりそれをパンにつけると、取り出してちよつとの間思考が停止していた木元に差し出した。

彼の思考が戻ったとき、感情の沸点をそれは完全に醒まし、冷静

を下回らせた。それはパンのように見えなくなっていた。カラシとブルーベリージャムと抹茶を混ぜたような代物だった。

彼は差し出されたそれを見つめながら言った。

「奇抜な色だ。絶対に手を伸ばしたくない上に、口に入れるなど考
えることすらできないな」

魔女が言った。

「食べてみてください」

ひたむきな真剣さの宿る瞳に、彼は恐怖を感じた。これは絶対に
毒薬だ。ドラゴンですら、避けて通るだろう。しかし、彼は手に取
り、まず最初に臭いを嗅いだ。唾液が流れるようなにおいではな
かった。

彼はそれを見つめて言った。

「鼻が麻痺したようだ。私はこれを食べたら麻痺する。絶対に」

「大丈夫だよ」

彼女が自信ありげにうなずいた（何の自信なのか彼は尋ねなかつ
た）。

「本当に美味しいから」

彼はそれを見つめ、もう一度臭いを嗅ぎ——戻ってきたときから、
私の鼻は麻痺していたんじゃないのか？——口を開けてそれを近づ
け、ちよつとかじろうとして空気を食べた。魔女に目をやり、何と
なく小ばかにされているような気がして、虚栄心が立ち上がった。
彼は心に勢いをつけると大口でそれにかぶりついた。

世界が光に包まれた。彼は一瞬で気を失った。

一杯の紅茶とクッキーの入った籠が、薄緑と白のチェック柄が入
ったテーブルクロスをかけた丸テーブルの上に載っている。ここは
アラスカ。道理で寒いはずだ。

木元菊は齒をガタガタ鳴らしながら、湯気の漂っているティーカ
ップの取っ手を人差し指と親指でつまみ、口元に運んだ。それは冷
え切っているところか凍り付いていて、湯気ではなく冷氣が見えて

いたのだった。

「寒い！ 寒いぞ！」

口を動かすと夢から覚めた。重たい体を起こし、辺りに視線を走らせる。暗闇だが洞窟だ。火の燃えたにおいが残っているだけで、火は残っていない。

彼は口の中のものに気づき、それを嚙もうとしてまた気を失うところだった。慌てて吐き出し、恨み辛みを言ってやろうと魔女の姿を探す。いない。

逃げたんだ！

「そこにいるのは分かってるぞ、木元！」

洞窟の外から、まぎれもない大佐の声が聞こえた。木元は出て行くこうとして、松明の灯りを山ほど見た。彼の頭は寝起きながら素早く回転した。魔女はいない。大佐の声が聞こえる。外には松明の灯りがたくさん輝いてる。間違はなく、魔女は逃げ、大佐は裏切り、連中はここを取り囲んでる。

彼は洞窟の奥に目をやり行き止まりを思い出した。彼は洞窟を見つけたとき、熊がいなかったかと思っただけで恐る恐る確かめたのだ。

大佐が外で怒鳴っている。

「バベル！ 賢明な魔女なら抵抗は無意味だと知っているだろう！ わしは争いを好まん、おとなしく出てくるんだ！」

まるで立てこもり犯を説得する両親か何かみたいだ、と木元は思った。あいつにはむかつかされるが、出て行くしかないだろうな。

そこで彼は斧を持ち、両手を高く上げて洞窟から出た。

ざわめきが起った。それを鎮めたのは大佐の声だった。

「バベルはどこだ！」

松明の灯りから産まれたように大佐が出てきた。木元の目は暗闇に慣れていたもので、その灯りも手伝って、武装した兵士たちの姿をそこら中に見ることができた。剣があり、弓があり、槍がある。盾を持ったやつらが前衛で、それ以外は洞窟の入り口を半円に囲みながらかなり怯えているようだった。

木元は両手を上げたまま答えた。

「私は知らない」

「英雄ぶつてもためにならんぞ」

木元は「美味しい」と言われた代物を食べ、昇天しかけた（半分していた）ことを思い出し、魔女に対して無性に腹が立っていた。が、その説明をする気にはならない。

前衛の後ろに控えている兵士の誰かが震える声で言った。

「そ、その、奇妙な物体を、下に置け」

——大佐はムツとしていた。

木元は連中が斧を知らないのだと解釈した（こいつらが何を知っていて何を知らないか、誰にわかるっていうんだ？）。彼は弓を持ったやつらに注意を向けたまま、刺激しないようゆっくりと斧を置き、身体をまっすぐに伸ばした。

一人の兵士が盾の間から出てきて、大佐の隣に立ち、腰をかがめて尋ねた。

「あいつが一人ですか？　どうも見た目が違うような気がするのですが」

「間違いなく、木元だ」

木元は手を上げようか下ろしたままでいようか迷いながらも話を聞いていた。そしてまたも神がかり的なひらめきがおとずれた。彼はきよろきよろと兵士たちに、その向こうの木々に目を向け、演劇のテストがあれば落第点を貰いそうな演技で、困惑したように首を傾げた。

「私はいったい何をしていたんだろう？」

彼はそう言いながら兵士たちの囲いの薄いところへ歩いて行った。すぐに「止まれ！」と言う声が上がったので、ちよっぴり驚きながらそっちに目を向けた。

大佐の隣にいるやつが怒鳴った。

「動くな！」

木元はもう一度首を傾げ、そいつのところに近づいて行った。そ

いつは意外と臆病者なのか、落ち着かなげに視線を斧、大佐、もはや前衛ではない盾の連中に動かし、結局大佐の影に隠れるようにして一歩下がった。

木元は近づいて尋ねた。

「いったいどうしたんですか？」

彼の平静さにそいつは面食らったようだった。木元は大佐を見下ろす位置に立ち、疑わしそくにその禿げ頭（大佐はもう虫取り少年ではなく最初の頃と同じ軍服を着ていた）と感情の乱れかけた兵士を交互に見つめた。

大佐が峻厳な顔で言った。

「いったいどうしたとは、こっちが聞きたいな、木元！」

木元は眉間にしわを寄せ、目に疑い深げな光を宿した——と思わせる努力をした。

「木元？ 木元って、何です？」

大佐の口が開いた——いや、カツと開かれた。鼻水が垂れていなければ、すべてを見透かす力を持った面だと言えただろう。しかし、鼻水は真っ直ぐ垂れていて、“あんぐり口を開けた”という言葉が浮かぶ表現にしかなくなっていなかった。大佐はその表情のまま数秒固まり、斧とその頭に付いた鬘から、短い髪の毛のいびつな形をしたコーヒ―豆に視線を移し、戻し、さらに移した。

大佐はかすれた声で言った。

「木元は……木元はあれだったのか？」

木元は視線をたどるようにして斧の頭に付いた鬘に目を向けた。そしてわざとらしく驚いて見せた。

「あれは……」

後を濁し、大佐に顔を戻す。

「私はあれを被ってたんですか？ そうなんですな」

あれと呼ばれる鬘を指差す。

「あれを見つけて、被ったことは憶えてるんです。けど、そこから先の記憶が曖昧で、気が付いたらここにいたんですよ」

大佐は口を開けたままだった。信じられないように、いびつなコ
ーヒー豆と鬘を被った斧に視線を忙しく動かしている。後ろの兵士
が「まさか、そんなことが」とつぶやいた。

二度と口を閉じそうになかった大佐が言った。

「そんなことがあるかもしれん！」

肩越しに振り返る。

「おまえ、あれを取ってこい！」

そいつは素早く別のやつに命令した。その命令された兵士は、恐
怖と怒りがごちゃまぜになったような顔つきで、しぶしぶ命令に従
い、斧に近づいて行った。手が届く範囲まで近づくと、おもむろに
剣を抜き放ち、何かばつちいものに触れるように剣先で鬘を持ち上
げると、落とさないよう慎重に運んできた。

大佐が後ろのやつに首を振った。その意味を理解したそいつは、
できるだけ身体を剣先から遠ざけているやつに同じ仕草で命令した。
木元もその仕草を理解した。

「ちよ、ちよっと待つてくれ」

両手を前に出し、鬘から逃げるように後ずさりする。

「まさかそれを——」

兵士たちの前衛が盾を捨て、彼を羽交い絞めにした。皆楽しんで
いるようだったし、いつもの日常と平穏がぶち壊されたことで苛立
つてもいるようだった。鎧を着た連中に羽交い絞めされるといっ
のは、何か機械への恐怖を連想させる——無慈悲で、圧倒的な力だ。

木元は動かない両腕に力を込めたり、自由な足を前に突き出して
身を守るうとしながら叫んだ。

「やめてくれ！ 許可を、許可を取ってから！」

彼は近づいてくる鬘と剣先から大事な顔を守ろうと、嫌いな食べ
物や歯医者の中頃から首から上だけで逃げる少年のように、首を動
かして顔をそむけ、口と目をしっかり閉じた。

彼は頭に鬘が載った感触を覚え、自分で始めた演技を終わらせる
のか続けるのか、判断しなければならぬことを悟った。どちらも

好転しそうにはない。そこで、彼は演技を続けた。両腕にかかった無慈悲な圧迫感と痛みが消えた。

彼は目を開け、自由になった両手を使って被り直し、鬘木元としての第一声を上げた。

「私は貴族、木元菊だぞ」

十番限界の“十”

畏怖を帯びた声があちこちから漏れた。木元はちよつといい氣になつた。

大佐が言つた。

「よし！ 魔女はどこだ」

木元は冷静に答えた。

「知らないな。私は眠っていた。目を覚ますと、あいつの姿はなかった。荷物もなかった」

喋っているうちにいら立ちが募る。だが、彼は我慢して続けた。

「洞窟へ入って調べてみればいい。一人でもドラゴンを倒すといつてたから、そうするつもりだろう」

大佐が驚いたように言つた。

「なに！」

そして、ちょうどチワワが首を傾げるのと同じような仕草をする（木元は和むどころか殴り殺したくなる衝動を抑えなければならなかった）。

「魔女は気づいたのか？」

魔女が気付きそうなことを木元は考え——あの混ぜ物が毒薬に使えるとか、においだけで鼻が麻痺するとか——うなずいた。そうだ、効き目抜群だ！ ドラゴンなんて目じゃないぞ！

大佐は木元の沈黙から何かを悟つたようだった。

「やはりな」

まだ木元の鬘を恐々と見つめていた兵士が尋ねた。

「いったい何のことです、大佐」

大佐は答えずに言つた。

「王様と直接話さなければならんだらう」

そして、取り巻き兵たちに命令を下す。

「洞窟の中を調べてこい。もしかしたら、バベルが隠れているかもしれない」

取り巻き兵たちが命令に従い、結構時間がかかってから誰もいないという報告をした。時間がかかったのは、洞窟に入るのを怖がった兵士がいたからだ――いやすべての兵が怖がったのだ。そいつらの恐怖は鬘に向けるもの以上で、叱咤した大佐に反抗しようか、従おうか迷いが生じるほどだった。

結局、最も臆病者が勇敢な数人が洞窟に入り、半分が気絶して戻ってくると（そいつらは腹を減らしていたらしい）、残りが誰もいないと報告をした。洞窟を取り巻いていた兵士たちは、その報告を聞いてから入って行った。

兵士が全員洞窟に入っていたし、大佐といくつか階級が上のような兵士もそちに注意を奪われていたので、木元はゆっくりと後ずさりしながら大佐から離れた。本当にゆっくりと。

階級が上のような兵士が言っていた。

「まさか、魔女はもツちエーみツかのことに気づいたのですか？」

大佐がそろそろ出てくる兵士を見つめながら答える。

「そのまさかだ。木元はもツちエーみツかのことをドラゴンと呼ぶのだ」

木元はさらに離れ、もはや手を伸ばしただけでは届かないほどの距離にいた。急ぐな、音を立てるな。

階級が上のような兵士が言った。

「一旦城に戻る必要がありますね」

大佐がうなずく。

「うむ」

そして、最も臆病者が勇敢な兵士の一人を仕草で呼んだ。そいつに木元のいた空間を指差して命令する。

「両手を縛っておけ」

空間をどうやって縛ろうか思案顔になった兵士を見て、木元はも

はや後ずさりでは間に合わないと感じ、身をひるがえして走り出した。振り返るのに足を滑らせたりはしなかったが、前方確認が遅れた。彼は真正面から木にぶつかってひっくり返った。

大佐の怒鳴り声が聞こえた。

「木元が逃げたぞ！ 捕まえろ！」

木元は顔を押さえて置き上がり——こんちきしょう、何でクソこんなところに腐れ木が立ってやがるんだ？——洞窟を振り返った。彼は一瞬で痛みを忘れ、脳みそが縮み上がるほどの恐怖を覚えた。兵士たちが洞窟探索とは違って意気揚々とした動きでやってくるのだ。それも、まるでそこで生まれたかのように、洞窟からぞろぞろと応援が駆けつけてくる。

木元は素早く、変形するようにはいいの姿勢になり、前に進みながら膝を起こして立ち上がった。連中は体育会系だ、と彼は走りながら思った。そういうやつらの性質を持っている。図体ばかりでかくて臆病者だが、弱虫や非肉体系の人間を見ると体当たりしてくる性質だ。優美さの欠片もなく、また理解しない。私が貴族であるということだけで、連中には追いかける（そしてタツクルする）理由になるんだ。

「私は貴族だぞ！」

どれだけ理由がわかってても叫び声を上げるのは別問題だ。

「貴族の木元菊を追い回したらどうということになるかわかってるんだろうな！」

彼は振り返り、どういうことになるのか理解しているのだと悟った。大佐と階級が上のような兵士を合わせて全員が追いかけてきている。彼はさらに叫んだ。

「許可を、許可を取ってから！」

彼の冷静な部分が疑問を投げかけた。許可を取ったら追いかけてもいいのか？ いや、まったくよくない！ 彼は前に顔を戻して加速し、弾丸のような速度になるうと努めた。走り、走り、顎が上を向いても走った。

呼吸が追いつかないどころか、酸素を一つも取り込めなくなったとき、彼は木の根を飛び越えようとして足を引っ掛け、空中アクロバットを決める暇もなく地面に落ち――「うつ」と彼は呻いた――バウンドしてから、かなりの時間滑った。彼は木の芽が生えてきそうなほどの時間をそのままの姿勢で過ごし、舞い上がった土ぼこりを構わず肺は取り込んだ。片方の耳が足音を聞きつけていたが、彼は動かなかった。声が後方の高いところから聞こえても、彼は同じ姿勢で動かず、頭は言葉を理解しなかった。彼は地球の一部と化していた。

ただ、鼻で呼吸ができるほどになったので、鼻で呼吸し、前を向いた鼻の穴が敏感に埃を感じ取って異物の排出を要請したので、くしゃみをした。くしゃみをして、彼は地球の一部だった。しかし、声の野郎はしつこく聞こえる。そいつはこう言っていた。

「巧みに注意を反らしたことは、流石戦士だと誉めてやろう。だが、わしの足を舐めてもらっては困るぞ、木元！ わしはこう見えても……ん？」

奇妙な音だった。地球の一部となった木元でさえ、人間として顔を上げ、その「ん？」と言ったときの音の出し方、顔の表情、口の動かし方を知りたくなった。しかし、その「ん？」がもう一度聞こえるかどうか待つというのも、動かなくて済むので歓迎できる。前兆を感じたら、確かめてみよう、と彼は地球の一部と化したまま決めた。声の野郎はまた話し始めた。

「おまえは木元なのか？ いや、そうじゃない。おまえは木元ではあるが、木元ではない。ここにいるのは木元ではない木元だ。だとすると、木元である木元はどこだ？」

壊れたんだろうか？ 木元はうつぶせに寝ころんだまま、声を分析して思った。それとも、これが大佐のテクニクか？ 好奇心を増大させて、私が自ら動くように仕向けているのか？ 何のために？ 見失ったりしてくれていればいいんだが、声を分析した限りではその希望は持てない。

彼は仕方なく手のひらをついて肘を伸ばそうとした。体中がしつかり地面に根付いている——たぶん立派な胸毛のせいだ（彼は貴族的な男らしさを胸毛とギャランドウの迫力だと思っていた。もちろんつけ毛だが）。彼は腕に力を込め、体中から生えた根を地面から引き抜こうとし、途中で息をついて、もう一度試した。膝を曲げて地面と胸元の間に入れ、わずかながら楽になると、身体を垂直にしてもう一休み。岩の上の人魚のように座り込んだ姿勢で後ろを振り返った。

礫にされたばかりのような大佐がいた。誰かが槍を構えて突き刺すのを待っているような顔をしている。本当に、そんな恰好と顔をしている。大佐一人しかない。

木元は骨っぽいキンキン響く人魚のような声で言った。
「いったい、どういうことだ？」

大佐は答えなかった。視線は木元の上を通り過ぎ、さらに向こうを見据えている。

「魔法ですよ、木元さん」

木元は大佐の視線を追うようにして声に顔を向け、真っ黒いローブに身を包んだ魔女が立っているのに、急激な苛立ちを覚えながら気付いた。彼女の周りに下草はなく、木の幹も視界を塞ぐ場所から逃げ出している。

大佐が怒鳴った。

「バベル！ やはりわしらを監視していたか！ だが勘違いしているぞ。わしは二人の味方だ！」

魔女は視線を大佐に向けた。理知的な声で尋ねる。

「ではどうして連中の指揮をとっていたんですか？ なぜ私の居場所をしつこく尋ね、木元さんを突きまわしたんですか？ それはあなたが裏切り者だからです、大佐。木元さんもそう思っているはずです」

木元にも一応、我慢の限界というものがあつた。彼の堪忍袋の緒は大概切れているが、中身は何も入っていないので大したことには

ならない——普段は、だ。今はそれが満杯まで入っていて、もうほとんど溢れ出している。凶暴になった彼は、猛烈な勢いで立ち上がり、地面を踏みつけながら前進し、魔女の胸ぐらを両手でつかんで揺さぶった。

「おまえは私を殺そうとした！」

彼は鼻から肺に空気を取り込み、口から声と一緒に吐き出すという無限の循環で叫んだ。

「立派に毒薬を作っているながら、食べ物だとぬかして食わせ、私を殺そうとしたんだ！ 死んだと思ったか、クソつたれめ！ そう思ったんだろ、ちくしょうが！ それでおまえは私を見捨て、洞窟の中に放っておいたんだ！」

彼はさらに魔女を荒々しく揺さぶって手を離すと、猛然と振り返り、礫が次第に解けて安堵の表情を浮かべている大佐に詰め寄った。同じように両手で胸ぐらをつかんで持ち上げ、振り回した。

「こころころころ態度を変えやがって、腐れハゲ野郎！」

大佐の表情は振り回されても変わらなかったが、木元は気にしなかった——そんなことは些細な問題だ。

「何が最高の部屋だ！ 何が最高の食事だ！ 私は洞窟で寝たんだぞ、食事は毒薬だったんだ！ 態度ばかりでかいゴキブリ野郎！ 何が大佐だ、イカしてんのか！ 軍隊もねえのに大佐気取ってんじやねえぞ！」

彼は手を離れた。大佐が飛んでいき、悲鳴もなく凍りついた無表情で、木の幹にぶち当たる。そのまま地面に落ち、ひっくり返ってとても大きな蠅の死骸になった。

木元は荒い息を吐きながら、両方に背を向けて歩き出した。一歩、また一歩、と肩を怒らせて進む。もうドラゴンなど知ったことか、と彼は荒々しく思った。私は帰る！ こんな世界など燃え尽きて吹き流されちまえ！

十一番木の“十一”

一本の木が避けてくれなかったので、木元はそいつと対面し、メ
ンチを切った。そいつはしらばっくれる嘘つきのように彼を扱った。
実に生意気な態度だ。

「よし、いいだろう！」

彼はあまりにも激怒していたので、対面してメンチを切るだけで
は収まらなかった。カエデに似た木は一步も引く様子がない。もは
や、対決するしかあるまい、と彼は思った。どちらか一方が折れて
道を譲るまで、戦い続けるのみだ！

彼は素早くそいつに組み付くと、左へのフエイントを決め、右に
押し倒そうとした。そいつは頑丈なやつなのか、しっかり地面に根
を張ったまま攻撃に耐えた。まだまだ、始まったばかりだ！

彼は押し、引き、足元を重点的に攻め、反則技的な頭突きを食ら
わせ、視界がゆがんだのでいったん退いた。そいつはまだ息が上が
った様子すら見せない。

「なかなかやるじゃないか！」

彼は三步下がり、腰を落として、勢いをつけたタツクルを決めた。
体重の乗った見事なタツクルだった。しかし、そいつはびくともせ
ず、タツクルした肩の方は悲鳴を上げた。彼はそのまま押し、靴底
が滑るのも気にせず押した。

「私の痛みはおまえの痛みだ！」

果たしてそうだろうか、と冷静な部分が戻ってきて問いかける。
彼はそいつを追い払った。木の幹に身体を押し付け、靴底が滑るこ
とに向こうが動いているような錯覚で励ましを得ながら、そいつに
全力を傾ける。

「根性の問題だ」と喰いしばった歯の間から言う。

おまえか、私か、どちらかが根負けする……いずれは。そして、それは私ではありえない。おまえが負ける。間違いなく。私が一歩進めば、おまえは一步下がる。現に、おまえは後悔を始めてるんじゃないのか？ 私に道を譲らなかつたばかりに、力の差を思い知らされることになって。いや、まだ早いかな？

「見ろ！ おまえはまた一步下がった！」

彼は勝ち誇ったように言った。

「悔しかつたらおまえも押し返してみろ！ 全力でぶつかってこい！」

木元はそのまま一時間ほど木に組み付いたまま、勝利の雄たけびを上げ続けた。

何かがおかしいと気づいたのは、アドレナリンの量が減少したからかもしれない。

とにかく彼は疑問を感じ——何だろう、この止めようにも止められない衝動は？——戦闘方法ではなく戦闘の意義について、強烈な痛みを訴えている肩で幹を押しながら考えた。こいつが道を譲らないことに対して、私は腹を立てている——が、こいつは木で普通は動かないものだ。今はつきりと分かつたのだが、それを認め避けて通るのも負けたようで気が進まない。

彼は力を抜いてそいつを見上げた。

「妥協案を提示する頃合だ」

返事はない。枝葉さえ動かさない。

「戦いはお互いを疲弊させるだけだ」

木元は疲労のため前後左右に揺れながら、平和を説く戦士のように辛抱強く返事を待った。疲弊しているのは彼だけのようだったが、それは見かたの問題だ。木の方も、本当はうんざりして、気力の減退を感じているかもしれない。彼の痛みは相手の痛みだ。

木元はふらふらしながら待ち、その返事を得た。木がしぶしぶとうなずいたのだ。

「よし、いいぞ！」

木元は気安さを込めて幹を軽くたたいた。

「私の素晴らしくも貴族的な提案を聞くといい」

返事はなかった。すっかり聞いている証拠かもしれない。

「おまえも私に同じことを感じていると思うが、おまえはかなりガツツがあり、ファイトがある。だから、私はおまえに賞賛の意味を込めて“木元の木”と命名してやろう。“木元の木”は私の敵ではないから、お互いに道を譲り合うことにしよう。貴族的に、譲歩してやってもいい。ほら、左に一步だ」

彼は右に一步動き、間違えたことを悟った。言い訳する。

「おまえから見て、私は左に動いたぞ」

木元は気にしていないようだった。

「さ、おまえも私の左へ動くんだ。つまり、おまえから見て右だ」
しかし、木は強情なのか動かない。動こうともしない。

「おいおい、私は妥協案を提示し、おまえはそれを呑んだんだぞ」

木元は努めて冷静さを保った。

「ほんの少しは“木元の木”という名に誇りを持って、貴族的な行動をとれないのか？」

木元は怒りの後の疲労とその前の一方的な戦闘——ベトナム戦争のようなもので、アメリカが撤退したのは彼と同じ理由かもしれない——、そしてさらに前の逃走での疲労が積み重なり、精神的に口——ストしたコーヒー豆のように丸くなっていた。彼はため息をついて“木元の木”を撫で、友好的な笑みを浮かべた。

「おまえは大したやつだ。私のプライドと同じで、決して折れないんだな。“木元の木”よ、素晴らしい大木になるがいい！」

木元は一時間も組み付いた相手に親近感を覚えながら、辺りの暗闇がさらに深まり、また普段の闇に戻るのに気づいた。しかし、そんなことはどうでもいい。彼は“木元の木”に愛情を注いでいるのだし、それは彼にとって目新しいことなのだ。彼の人生における重要な瞬間で、邪魔をする奴は不法者でしか——

木元はカタパルトで射出されたように吹き飛んだ。風に嫌われて五メートル先に落ち、下草の上を突風で勢いを増しながら転がる。頭の中では疑問が――何だ？ 何が起きた？――渦巻き、身体と一緒に転がる。半狂乱のていで手足を振り回す姿はまるで腕の生えたボーリングのボールみたいだ。ピンと勘違いして木の幹に当たっても仕方がない。ドーン！

信じられないことに彼はピンに負けたボールを演じ、反対側に転がってから紙でできたサイコロみたいにつなぎ目を解き、十字架のようになってあおむけに横たわった。揺れ動く枝葉に囲まれた空が見える。爆弾だ、と彼は思ってたきのこ雲を連想した。近くで爆弾が爆発したんだ！ 放射能だぞ！

彼は混乱しながら慌てて立ち上がり、揺れる視界の中で走り出すと、また木にぶつかった。今度はその場でひっくり返る。倒れ込んだまま大地の震動を感じ取り、遠くで聞こえる叫び声や怒鳴り声を背景に、音のない冷静な声が言う。爆弾なら蒸発してるはずだ（それほど冷静ではないかもしれない）。広島資料館で見た原爆の威力を思い出せ！

「原爆じゃない？」

彼は上体を起こした。

「じゃあ、何だ？」

周りの景色は揺れ動いているが、視界は正常で良好だ――それは目の前の一本の木が証明している。耳はまだ混乱しているらしく、どこかで戦闘が繰り広げられているような音が聞こえる。そんなものは後回しだ。それより、あいつのことが気になる。

彼はふらふらと立ち上がって“木元の木”を探し、無事であることを安堵の思いで確認した（なぜわかったのか？ 精神的な結びつきじゃないことは確かだ）。一つの心配事が減った彼は、次に耳の調子を心配した。そいつによると、戦場がこちらに向かって近づいてきているらしい。

「本当に嫌な幻聴を聞かせてくれるじゃないか」

彼は顔を動かさずに、眼球だけで見えない耳の反応をうかがった。戦場には方角があるようだった。東西南北ではないが、木元のぶつかった木のずっと向こうで繰り広げられているように聞こえる。彼はそつちを見て、草木が生い茂った数十メートルほどの限られた視界の中で、戦場を想像した。いや、しようとしてしなかった。手の込んだ幻聴があるなら、彼が思い浮かべていたのはそれだ。

「疲れてるせいだろう」

彼は“木元の木”に背中を預けて座り込んだ。

強烈な振動で真ん丸の目をパチツと開け、怒号と共に木々が裂け、倒れる音を聞いた。

目の前の光景は迫力的で芸術的だった。

あの体育会系の兵士たちが包囲の輪を広げながら下がり、空気に槍を突き出したり剣で斬り付けたりしている。その中には大佐の姿もあり、主に怒号を上げている。仮面を外した魔女は、木々を操りながら輪から遠のいたり近づいたりしている。

木元は熱波に気づいて立ち上がった。そして、みっともなく口を開けて輪の中心を見つめ——いや、見上げた。

でえええつかいドラゴンだ！ 彼はそう思った。でえええつかいドラゴン！

そいつはえらの張った三角形の頭を持っていて、その先に付いたちっちゃな口——それでも、一軒家を一飲みできそうな大きさ——を開き、地獄で錬成されたような歯で兵士や魔女を狙っている。首は長くてよく動き、弓が放った矢を軽々とはじいている。前傾姿勢の体には、首の根元に王者の風格があるたてがみと、器用そうな前足、土踏まずのなさそうな後足、巨大な尻尾と翼がついている。

「もっちエーみツかああああ！」と大きさも姿も蟻みたいな大佐が叫んでいる。

厄介なことに、もっちエーみツかは木元と“木元の木”の方へ、新幹線よりもでかい尻尾を左右に振って木々をなぎ倒しながら、一

直線に向かってきている。二百メートルほどの距離だが、そいつの一步が何十メートル進むのか神のみぞ知るだ。

木元は“木元の木”を肩越しに見て、もっちエ←みツかに視線を戻した。こいつは私のプライドだ！ 決して折れはしないが……いや奇跡を期待したり、希望的観測をするのはやめろ！ 注意を、注意を引きつけないと！

彼は右斜め前に弧を描きながら走り、もっちエ←みツかに向かつて叫んだ。

「こつちだ亀頭面！ 変態化け物野郎！」

もっちエ←みツかには明らかに通じていなかった。耳がないのかもしれないし、言葉を理解しないのかもしれないし、そもそも木元の声が届かなかったのかもしれない。

そこで彼は走りながら、言葉を理解するやつに叫んだ。

「目だ！ 目を狙うんだ！」

魔女が反応した。木元は走りながら（今なら、もっちエ←みツかを頂点とした二等辺三角形が彼と“木元の木”でできるぞ）、もっちエ←みツかの目を狙って木の枝が伸びるのを見た。怪物が亀頭に似た頭を振りながら、たまらず足を止める——素晴らしい！

「いいぞ！」

太い足元に向かって兵士たちが突進する。比率的には無数の蟻がウサギに襲い掛かるようなものだ。木元は一匹の蟻みたいに素早く走りながら、真正面を向いた鼻の穴と口で空気を取り込み、口か他に開いた穴から吐き出して、“木元の木”から遠ざける方法を考える。目を狙うのは基本的戦略だ。次は？ 股間か？ そんなものがあるのか？

もっちエ←みツかが頭と尻尾を振り回し、足を踏み鳴らす。木々が飛び、裂け、兵士たちが空を舞う——が、やつらは大佐に次いで頑丈らしく、異様なほど戦闘復帰率が高い。みんなアドレナリンの塊で、大きさで言うなら蟻、見た目で言うなら猪のように突進して行く。

「足だ！ 地面に足を固定させろ！」

そんなことして大丈夫だろうか？ 木元は走りながら不安を感じた。振り返って“木元の木”の方角を見ると、まだいくつか力エデやカシワに似た木が立っていた。よし、尻尾はあそこまで届かない足を固定しても大丈夫だ。

まだもツちエーみツかが足踏みしていたので、彼は叫んだ。

「魔法だ！ 私の斧を止めたみたいにな、やつの足を封じるんだ！」

彼は前方の障害物を見て取り、慌てて走るのをやめ、身体全体を後ろに傾けながら足の裏でブレーキをかける。水上スキーのように少し滑り、つま先が障害物である木の根に触れる。両手で幹を押し、顔の形が変わるのを防ぐと、彼はそいつを回り込もうとして声を聞いた。

「いいいいいいやっほう！」

声は奇妙にうねり、木元の近くでバウンドして、別の木にぶち当たった。飛ぶときは楽しかったのだろうが、バウンド後は明らかにそうでもなかったらしい。木元はもはやピクリとも動かないそいつに近づき、鞘に差したままの剣を見つめて、こいつはいったいどうやって戦ってたんだろう、と疑問を浮かべた。ま、素手か何かだろう。

彼はしゃがみこみ、鞘を下げているベルトをそいつから引きはがすと、何となく格好よさそうだったので自分の身体に巻き付けた。身も心も戦士っぽく立ち上がる。そして、背中に感じた熱波を振り返って、彼は戦士っぽくない啞然とした表情を浮かべた。

あいつは、あいつは火を吐いてやがる！

木元は夕焼けのようにオレンジ色に染まる梢に目をやり、首を振りながら火を吐いているもツちエーみツかを、木々を自在に操って華麗に舞っている魔女を見つめた。炎は広がり、兵士たちを飲み込み、“木元の木”に迫っている。ダメだ！

名付け親の彼は駆け出した。戻りながら、炎とそれを吐いている亀頭面に憎しみの視線を投げる。炎の勢いが増した。

「よし、わかったぞ！」

彼は大佐みたいな声を出し、走りながら炎にありつたけの悲しみの視線を投げかけた。

炎の勢いが変わらなかったたので、彼はわかつていなかったことを認め、微笑みかけたり絶望の眼差しを向けたりした。炎はまだ燃え広がっている。なぜなんだ？

「なるほど、そういうことか！」

今度は、もツちエーみツかに向けて、同じような感情の視線を送った。同情を誘う潤んだ目、幸福感一杯の笑った目、誰も手出ししない死んだ魚のような目。

もツちエーみツかが首を上げ、下ろしながら彼に向けて火を吐いた。

いや、正確には彼の前方、“木元の木”の方向だった。迫っていた炎がその勢いを受け、さらに加速する。彼は足を止めて熱波から顔を守るために両腕を上げた。顔が真っ赤に火照り、髪の毛の焦げた音と臭いがする。熱波が止み、腕を下ろすと、目の前はオレンジと消防を連想させる赤に染まっていた。

「きいいもおとおお！」

木元は絶望の咆哮を上げた。

十二番復讐の“十二”

何も感じない数秒が流れ、木元は自分ですら意識していない涙を流しながら、燃える木々を死んだ魚のような目で見つめていた。煙を上げ、倒れ、炭と化す“木元の木”の仲間たち。鳥たちの住処、虫たちの安息の地、彼に妥協案を提示させた“木元の木”が、やがては沈黙の夜へと移り変わる夕日の色に染まっている。その光景を見つめる彼の瞳に、全く別の光、何ものも恐れない炎が燃え上がった。

彼は剣を抜きながら向きを変え、もっちエーみツかを真つ向から睨みつけた。涙は燃える熱で乾き、その痕だけが頬から歪んだ顎元まで線を引き、キラキラと輝いている。彼はその輝きを反射させるように剣を構え、もっちエーみツかに向かって駆け出した。

距離が縮まるにつれてその巨体が視界に広がり、亀頭面は高く遠くへと離れて行く。周囲の木々は炎に包まれ、枝葉と舞う火の粉は蛍光のように辺りを飛び交っている。服や髪に張り付く弾けた燐、肌を焦がす熱波が身体を撫でるのにも構わず、彼はその中を駆ける。目は一心にもツちエーみツかを見上げ、地面と平行に走る剣の切っ先は目標をぴつたりとらえている。

大佐が直線上に現れた。

「無事だったか、木元！ やつは思っていたよりもでか——ハアッ！」

横っ飛びした大佐のいた場所を駆け抜け、後方に憤怒の声を聞きながら、木元はもっちエーみツかに走り寄る。木々が一瞬視界を塞ぎ、それが開けたとき、亀頭面が目の前にあった。周囲の炎に赤く輝く瞳は爬虫類のそれで、鋭い歯は地獄の山を連想させる。

「“木元の木”の敵」

彼は叫んだ。

「討たせてもらうぞ！」

六階建てビルほどもある頭が、昇天する龍かもつと卑猥なもののように、地に逆巻きの風を起こしながら持ち上がる。声が聞こえた。

「木元さん！ 戦況が悪すぎます、いったん——」

木元は右端の方にある業火を寄せ付けていない開けた空間と、固まって縮れた鬘を指差している兵士たちの集団、そしてその前に立つ魔女を目の隅で捉え、無視して加速した。

「——無謀すぎます！」

もっちエーみツかの頭が、まるで巨大なバベルの塔かもつと卑猥なもののように、そそり立ったまま停止する。頭と胴体をつないでいる巨大な首が、奇妙な音を立てて脈動する。天に向けて何かを放つのもかもしれないが、木元は別のことに疑問を持っていた。もっちエーみツかの足が視界を覆って久しいのに、未だその存在に触れていないのはどういうことなんだろう？

見上げると反り返った首とその先に付いた頭が傾き、彼の頭上に向かつて降ってくるところだった。浮かんだ疑問で理性がつながった木元は、慌てて足を止め、無駄だと知りつつ剣を頭上で構える。その剣は心理的な配慮をしてくれなかったので、彼は首と頭が降ってくるのをまともに見なければならなかった。ヒーツ！

巨大な首と一緒に、強大な空気の壁が降ってくる。木元はその風圧に怯み、顔——主に鼻の穴と目——をかばいながら足が滑り、滑りながら浮くのを感じた。咄嗟に伸びてきた燃えたままの枝が魚を捉える網のように彼を支え、周囲の炎を消す勢いの風をもろに耐えなければならなかった。軽い火傷を負った皮膚は張力を受けたゴムのように伸び、彼の顔は一瞬だが地獄からやってきた使者とそっくりになった。

風は長くは続かず、木元は目を開けて亀頭面の嘔吐しそうな顔を見た。体に似合わない小さな口が開き、歯と歯がぶつかって火花を散らす。薄いピンク色の口内が見え、その奥の一番暗いところから

火炎が……出てこなかった。代わりにゲップに似た音が聞こえ、木元の真正面を向いた鼻の穴に強烈な腐臭が飛び込む。

木元は脳みそが吹っ飛んだみたいに気絶した。しかし、その臭いがありにも強烈だったため、脳みそは生死の境目と感じて彼の意識を目覚めさせ、鋭敏な嗅覚は慣れか麻痺かの間を取った。その刺激臭は鼻だけでなく目も襲い、彼は涙を流しながら目を瞬かせ、本当の生死の境を目の当たりにした。

もっちエ←みツかが彼を見つめている。木元には鼻面しか見えなかったが、貪婪な光を放っている眼は想像で補った。その象が隠れた掃除機のように木元を引っ張り、同じサイズの扇風機みたいに彼を押しやる。突然、その前後の力が横から来た別の引力によって崩れた。

彼の身体はもっちエ←みツかの鼻面から逃れ、次の瞬間には魔女と兵士たちの集団に飛び込み、誰かの腕が鎧で一撃、地面でもう一撃食らった。

「籠の要領でひとまず逃げましょう」

木元は身体を起こして、魔女の提案に心の中で賛同しながら、燃え上がる森に目を走らせた。もっちエ←みツかの巨体は炎で揺れる空気の上に見える。火の赤と夜の黒が混じって、その姿を余計に卑猥に見せている。

唐突に兵士Aが首を振った。

「いや、逃げることはできない」

他の兵士たちが賛同するようにうなずき、思い思いのことを言い始めた。

「我々は敵に背を向けたことがない」と現実に背を向けている兵士B。

「最後の一兵まで戦い、敗北するのが我々だ」と敗北主義者のような口調の兵士C。

最後に兵士Aがまとめた。

「それが我々の誇りだ」

木元は獲物を探すように頭を動かしているもツちエ←みツかを見上げて言った。

「私はいったん退く。栄光は生きて得るものだ、と閣下もいつていた」

魔女は最初から兵士たちの言葉など聞いていなかったらしい。籠を作り上げ、一番に潜りこもつとしていた。その籠は生焼けの木や枝で丸く編み上げてあり、一部にいつでも塞げそうな小さな穴が開いている。

木元は立ち上がり、奇跡的に同じ方向へ飛んでいた剣を拾って鞘に納め、籠に近づいて足を止めた。何か物音が聞こえなかったか？まさか、もツちエ←みツかが気づいたのか？

茂みを押し広げながら大佐がやってきた。

彼は籠を見るなり納得したようにうなずいた。

「体当たりというわけだな、バベル！」

閣下というのが何者なのかで揉めていた兵士たちが、一斉に魔女の作った籠に目をやった。木元はもツちエ←みツかを振り返り、やつも気づいたことを知った。

「急いで乗り込め！」

彼は急いで穴に飛び込みながら言った。

「ドラゴンが気づいたぞ！」

もツちエ←みツかの首が鞭のように動く。三番目に大佐が入り、木元はその黒いやつを横に避け、穴の縁に手をかけて兵士たちを引き入れる。火を吐けないと判断したのか、もツちエ←みツかが鋭い歯のついた口を開けて襲い掛かる。そこに、炎を纏った木や大枝が目を狙って伸び、巨大な三角形の頭が退く。兵士たちは洞窟で見た数の四分の一以下で、七人しかいなかった——籠の中で潰れそうになるには十分な人数だ。

木元は引き入れ作業に没頭していて気づかなかったが、兵士の五人目が入った後に大枝や木は動きのない自然の一部に戻っていた。

そのことを知っていたのは、怯みながらも尻尾で攻撃しようと考えたもツちエーみツかと、兵士たちに埋もれてうまく魔法の使えない魔女、そしてジャングルジムで遊ぶ子供のように籠の内側にぶら下がって懸垂している大佐だけだった（が、最後のやつは理解していなかったらしい。一瞬だけ木元に目をやってその作業にうなずくと、筋力アップのため懸垂に戻ったからだ）。

木元は自分が押し出されないように籠の縁をしっかり持ち、最後の一人を引き入れながら、彼らの世界ならリングとでも名が付きそうな化け物に怒鳴ろうとして、“アイ・ウィル・カムバック”という用意していた言葉を飲み込んだ。カムバックどころか、エスケープにはヘルプが必要だぞ！ 素早く振り返ってすし詰め状態の籠内に目をやる。至近距離にいた兵士が瞬きした。

木元は恐怖で上ずった声を出した。

「用意ができたぞ！ 急げ！」

瞬きした兵士がうなずき、木元の眼差しを受けて心持ち首を後ろに向ける。

「用意ができたぞ、急げ！」

その言葉はさらに後ろの兵士から、上下左右に拡散する。大佐の別の声——「よし、まだ大丈夫だ！」——が響く間に、木元は視線を恐怖の対象に戻した。器用に翼を操りながら身をひるがえし、もツちエーみツかが尻尾を振る。尻尾が唸りながら木々をなぎ倒し、風圧で炎を吹き飛ばしながら迫る。

「尻尾だ、飛び出せ！」

前回の言葉同様、兵士たちというスピーカーが反応し、木元の上ずった声を安定した響きに変える。燃え尽きそうなものも、葉だけを失ったのも、地面を這いながら籠にたどり着くと、二、三周巻きついて隙間を覆い、わずかに地面から離す。それはちょうど、ゴルフボールがピンに乗ったようなものだった。次の瞬間には、強烈な尻尾の一撃が、ボールをドライバーで打ったかのように、籠を吹き飛ばしていた。

十三番球の“十三”

籠と一緒に意識が吹き飛んだのは……ほとんど全員だ。

二人だけ——誰だかわかるだろ？——保身に優れたやつらだけが状況を認識していて、その内の一人は対処しようと躍起になっていた。

籠の中で枝をハーネスのように利用して身体を固定した魔女がその一人だ。彼女は寝不足で魔力を使い切っていたが、意識を保っているもう一人が大佐であると知っていたし、気絶した他の連中よりもそいつが役に立たないことを知っていた。だから、何とかしなきゃいけない。自分がいつだって何とかしてきたのだ。

彼女は圧力が弱まった頃合を見計らって、籠にわずかな隙間を作った。中での進行方向は分かっていたので、隙間から外を覗いたとき、籠がどちらに飛んでいるのかすぐに理解した。頭の中が石か何かで埋まっていそうな王様のいる、見た目の素晴らしい城だ。

どうしよっか？

籠が下降に入り、風が強まったので、彼女は慌てて隙間を閉ざした。圧力に耐えながらできないことを考える。籠から枝を伸ばして支えにすることはできない。大地魔法は触れていないと使えない。簡単な火と雷はこの場合役に立たないし、風と水は高等すぎて使えない——というよりひな型を作っていないし、編む時間がない。

彼女はほっぺたを膨らませ、それが圧力で歪むのを感じて、仮面を忘れてきたことに気づいた——まったく、もう。彼女は次に、できることを考える。もツチエーミツかの尻尾に耐えたのなら、地面への衝突にもこの籠は耐えられるはず。それに、城に植えてあった木を伸ばすことはできる。受け止めることも可能かもしれない。

どうしよっか？

大佐は、兵士たち全員の何倍かの体重を受けながら、魔女と同じ疑問を浮かべていた。ハイクオリティな彼の想像力は、この籠がもツちエ←みツかのどこに当たり、どういった行動をとるべきか、いくつもの想定を描き出す。もし、あの巨大な翼なら……

「乗れるぞおおおお！」

魔女は大佐の叫びを聞きながら、植物を操る魔法——複雑に編み込んだひな型——にアレンジを加えていた。時々、隙間を作って外を覗き、落下地点を予測する。網目状に組んだ木々で籠を受け止め、その速度よりわずかに遅く網目を変形させる、彼女の計画はそういうものだった。これには細かい操作と、それにとまなう集中力が必要だ。大佐に意味の分からない言葉を叫んでほしくない。

もちろん、大佐は自分の想像に興奮して叫んでいた。

「倒したぞ！」

これは十番目のシナリオで、籠がもツちエ←みツかの頭に直撃し、割れたところから出てきた大佐たちは一丸となって、巨大な目に向かって突進するというものだった。もツちエ←みツかの弱点はそこらしい。違うかもしれない。

「そろそろか」

野性的な六感の働きに、大佐は兵士たちを押しつけて構える。押し寄せる圧力にも歪まない顔は、木と枝に包まれた籠の内側を通り越して三角形の頭を睨み、鼻から頬に流れた鼻水が決着の迫る時に流れた汗を飲み込む。彼はその瞬間、息をのみ、眉を寄せ、一から十のシナリオすべてに対処する心構えを作った。ウートレイ国はわしに感謝するだろう。わしを英雄と称え、絶えずそのことを国民に知らしめ、示し続けるだろう。わしは伝説となり、新しくなる人々の心に刻まれる唯一のものになるだろう——いや、夢を見るのはまだ早いな。

大佐は野心的な笑みを浮かべていた。

魔女は笑みを浮かべているように見えたが、それは緊張のために強張ってできたものだった。位置を知るのはこれが最後だ、と思い

ながら隙間を作って覗く。城の壁とバルコニーにたたずむ王様（まるで石像のようだ）と、その手前に作った枝木の網が見える。これ以上は必要ない。彼女は隙間を閉じて、幸運の印を切った。

彼女が極めて精巧に編み込んだひな型は、彼女自身でも驚いたほど柔軟性に富んでいて、籠が纏った魔力と網の纏った魔力の連鎖反応を理論上は可能にしていた。後は待つだけだ、と彼女は思い、大佐と同じように息をのむ。籠が網に触れば、網は自動的に減速作業を行うはず。

王様はとてつもない恐怖を感じていた。城の裏手にある山の木々は炎に包まれ、夜明けに出発する予定だった第二大隊が消火活動に向かっている。火はここまで来ないだろう。来ないだろうが、心配だ。彼には、それよりもっと心配なことがある。空の巨大な目玉が落ち、呪いの一撃をこの城に、いやボクに食らわそうとしている！
いやだ、やめてくれえ！

彼は震える髭と体を持って城内に駆け込むと、足を止めて振り返り、窓ガラス越しに巨大な丸い球と、その手前の木でできた網に目をやる。あれはボクを守ろうとしてくれるのかな？ ああ、めど→めさ、そうであってくださいますように。

「もツちエーみツかがいればなあ」

彼は弱弱しく呟いた。

「あいつがいればあんな球……ヒーツ」

王様は顔をそむけて丸まり、王冠を押さえて目を閉じた。来る、飛んで来る！ 彼はがたがたと震え、大量の鼻水を流しながら怯える。歯を鳴らし、全身を揺らしながら、床にぴったりとくっついた足の裏だけで転がっていくのを防ぐ。どうか助かりますように。これからは身の丈に合った部屋で生活します。椅子の足を短くして、彼に休暇を与えます。本当にもツちエーみツかの討伐を行い——でも、もったいないなあ。だって本当にあいつを飼いならすことができますたら、他の国々を……命の方が大切だ。ああ、めど→めさ、これからはフンバに乗る練習も怠りません、四足のくそ生意気で、僕を

見下ろしてコケにするあの野郎に、ケツから出る何かのような臭いを放つあの汚げな動物に乗ることを誓い……。

籠は網に載った。というより、キャッチャーミットに飛び込んだボールみたいだった。網は魔女の理論通りに一定の圧力を吸収しながら曲がり、最後にはほとんど包み込むような形を取った——魔女の計算にミスがあるとすれば、それは減速に伴う距離を頭に入れていなかったことだ。籠は網と一緒に地面にぶち当たって跳ね上がり、もう一度落ちてまた跳ね、あと二度ほどバウンドを繰り返してから静かになった。

傷ついた網は自然の形を取り戻しながら引いて行っただが、籠の木々は戻るところがないのでその形を維持した。

「よっしゃ、こいやあ！」と籠が怒鳴った。

王様は窓の外を覗き、めどめさへの願いが通じたので、有頂天になりながら部屋を飛び出した。城に残った大勢の兵士たちに一瞬、恐怖を覚えたが——彼は押しつぶされて死にそうになった時のことをまだ憶えている——兵士たちがあの轟音の原因を確かめに行くのだと気づいて、安堵しながら後に続いた。

「空の目玉が一つ、落ちてきた！」

彼はとりあえず叫んだ。

「国宝にするぞ。皆、手を触れるな！」

兵士たちが、喚きながら走っている王様に驚き、道を開ける。王様のマントが羽ばたき、頭上の王冠が揺れる。揺れる王冠を片手で押さえた彼の姿は、雨の日に鞆が新聞で濡れまいとして走るサラリーマンに見える。が、兵士たちはサラリーマンを知らないのです、そのままの姿を見る。王様は階段を飛び、扉を足を踏み鳴らしながら開け、廊下を滑り、道に迷った。

彼はそれを認めず走り回っていたが、どこもかしこも同じように見えてきたので、立ったまま爆睡している兵士の一人に、“注意”と“近道”を巧みに使って気取られないようにバルコニーの下まで行く道を訊き出した——実に威厳のある行為だ。

兵士がそれほど馬鹿じゃなかったことは幸いだ。その兵士はバルコニーから飛び降りるという近道を思いつかず、王様に歩いて行ける近道を教えた。王様は偉そうにうなずきながら教えられた道を歩き、兵士の姿が見えないところまで来て駆け出した。

彼は一番最後にたどり着いた。球は兵士たちの編み出した恐怖の陣営に囲まれていて、その頭上にわずかな曲線が見えるだけだった。兵士たちをかき分けて、球に近づく勇氣はない。彼は石像のように突っ立ったまま言った。

「触れるでないぞ。それは国宝だ」

兵士たちは動かない。好奇心で輝く瞳を球に向けたまま、囁き合いながらも警戒している。槍を持った一人が球を突つつこうとして刃先を近づけた。球が動いた。兵士たちは輪を広げながら、思い思いの言葉を発する。

「動いたぞ！」

「生きてるのか？」

「何か入ってるんじゃないのか」

「くす玉だ。何が入ってるんだっけ？」

「俺だよ」

兵士たちはいつせいに、自分を指差している一人の兵士を見つめた。

「お前の、何が入ってるんだ？」

自分を指差している兵士は戸惑ったようだ。

「俺の……」

自分を指差している指先を見つめながら、そこに答えがあるかのようにゆっくりと喋る。

「俺の……」

「また動いたぞ！」

王様は広がってできた隙間に、勇氣を出して踏み込んだ。小さな隙間だ、小さな、小さな隙間。彼はその小さな隙間から抜きたいばかりに、気が付けば球と話の間に立っていた。そこから見た球はベ

らばうにでかく、月明かりだけでは表面がつるつるなかでこぼこしているのかわからない。まさに、国宝級の謎を持った代物だ。

「王様、あまり近づかれては危険です」

王様はその言葉に振り返って、その輪と球とどちらが危険だろうと考えた。球には謎がある。輪には謎はない——ただ、危険なだけだ。しかし、彼は理解ある人間だったので、自分が言ったと指差し、アピールしている兵士に尋ねた。

「何が危険なのだ？」

「そいつ、喋るんですよ」

別の兵士の答えを聞き——自分を指差した兵士は混乱の極みにあった——王様は球に視線を戻した。喋るのか？

「それに動きます。生きてるんじゃないかと」

王様はじつと球を見つめ、それが動くか喋るかするまで待った。

使者かな？ そうかもしれない。王様は待ち、さらに待つて、ついに厭きた。振り返る。と、兵士の一人が彼を指差しして叫んだ。

「ほら、動いた！」

王様は自分ではないという確信があったので、球を振り返って見つめる。動いていない。彼はもう一度、今度は少し長い時間待つてみた。動かない。そこで振り返る。と、また同じ兵士が彼を指差した。

「まただ、動いた！」

王様の確信が揺らぎかけた。肩越しに素早く球を見る。そして、動いていないことを知ると、兵士に視線を戻した。今度も兵士は彼を指差して言った。

「動いてる、動いてる！」

よし、いいだろう。王様は両こぶしを固め、彼を指差したままの兵士に近づく。ほら、よく見る。僕は動くんだぞ。あたりまえだ！「当たり前だ！」

王様はそいつの腹にパンチを食らわせた。見事な体重の乗ったパンチだったが、こぶしと鎧には明確な強度の差があった。

「うつ」

王様は腕を引き、こぶしを涙の浮かんだ瞳で見つめてから、怒りの視線を兵士に向けた。そいつは痛くなさそうだったが、驚きと戸惑いと奇妙な恐怖が混じった表情を浮かべて王様を見下ろしている。異常者を見る目だ。異常者を。王様はそれが気に食わなかった。

王様がその兵士に怒りの視線をぶつけている間、自分を指差したままくす玉に自分の何が入っているのか考えていた兵士が、ついに答えを見出した。腕を下ろしてみんなに告げる。

「俺の魂だ！」

「かかってこいやあ！」

兵士たちと王様はそいつの魂の雄叫びを聞き取った。輪を広げるべきか、そいつから離れるべきか、戸惑いながら兵士たちはそいつとそいつの魂を見比べる。そしてそれぞれ手に持った獲物を構え、魂の抜け殻に近いやつらはその兵士に、魂に近いやつらはその球に向かつて、怒号を上げながら突進して行く。王様は素早く身を伏せて丸まり、馬の嘶きに似た悲鳴を上げた。

「助けてくれえ！」

その悲鳴は兵士たちの怒鳴り声と魂の雄叫びにかき消された。槍が球を覆う枝木を切り裂き、剣がさらにその傷口を広げる。四方八方から振り下ろされる刃が木片を飛ばし、皮を削って食い込み、焼け焦げた表面を拭い去って生木を見せる。兵士たちの何人かは、らちが明かないと考えて斧を取りに行った。

一方、魂の抜け殻兵の方では、見事な格闘が終わったところだった。槍も剣も近距離過ぎて使えないため、取り巻きの兵士たちは素手を使っていたのだ。もちろん、少しの間は抜け殻の兵士も徒手空拳で応戦していた——が、数が数だけに今はもうパンチバグと化している。

斧を持った兵士が戻ってくる。そして、まだ挑発を繰り返している球に向かつて振り上げ、気合と共に振り下ろす。乾いた音が響き、他の兵士たちが後に続く。コーン、と打ってまた、コーン。何度目

かでその音が変わる、カーン。

「いてっ」

球の内部から挑発する声とは違う別の声が聞こえた。斧を持った兵士も剣や槍を持った兵士も驚いて一歩下がった。球は皮を向いたミカンか尻のようになっていて、攻撃の止んだ瞬間に、その隙間から黒くて小さな塊が一つ、飛び出してきた。驚き見つめていた兵士たちの連想したものは、奇妙なことに一致していた——が、それは割愛しよう。

その小さな塊は地面で一回転すると、隙間に向かって手を振り、後に続けと促す。奇妙な光景だ。向こうが了承したのか、その小さな塊は合図をやめて周囲に視線を走らせた。そして、首を傾げながらついに第一声を上げる。

「ここは、新天地か！」

王様は呆然とした兵士たちの足元から、安全で足のない開けた場所へと転がっていた。怯えながら立ち上がり、同じサイズの小さな塊を瞬時に仲間と理解し——ああ、こいつなら僕の苦境をわかってくれるぞ！——その正体に気づいた。

「大佐！」

王様の声に小さな塊が顔を向ける。

「おお、王様、よく御無事で」

お互い、うなずきあう。大佐が快活に言う。

「王様もこの新天地にやってこられたのですな」

王様は兵士たちを見回し、なるほど新天地だ、と思った。大佐も同じようにしながら言葉を続ける。

「あの憎きもツチエーミツかは、我々をこの地へと追いやり——」

球の裂け目から気絶していた兵士たちがぞろぞろと出てきて、見知った顔に顔をほころばせ、城を見てから山の方に目をやる。四人の後に続いた残りの兵士たちが、二人で真っ黒く炭で汚れた木元を、一人で魔力を使い果たした魔女を抱えて、球から外に運び出す。彼らは大佐の『新天地説』を風のざわめきと感じ取ったらしく、出迎

えた周りの兵士に木元と魔女を顎で示した。

「急患だ。病室へ連れて行ってくれ」

二人の兵士がかつて出て、木元と魔女を運び去る。七人の兵士たちは鎧についた灰を払い、他の兵士たちにどういうことがあったのか話しながら、酒が欲しいとこぼしていた。その中の、まだ筋肉化していない脳を持った一人が山の方を手で示した。

「もツちエ←みツかの野郎、木を全部焼き払うつもりだぜ。消火には、誰か向かったのか？」

「第二大隊が行ったよ」

「やつが飛び立ってなけりや、本当に全滅するな」
「そんなに酷かったのか？」

七人の兵士は同じようにうなずき、疲れ汚れきった顔で仲間に目をやると「酒が欲しいな」と呟きながら歩き出した。他の兵士たちも、魔法でできた籠だと聞いて驚き、球を振り返りながら、何があったのか正確に知ろうと七人の後に続く。王様はその動きを目の隅で捉え、ぼんやりと認識しながら、大佐の話を聞いてた。

「——あれほど巨大とは。イブカニアなどが束になっても敵わんでしょうな。しかも、見境がない。放っておけば、あの大陸ごと食らい尽くしそうな勢いでしたぞ」

大佐は話し続けている。王様は相づちを打ちながら、なんとなく過去を懐かしんでいた。僕と同じ大きさの友達。もツちエ←みツかに乗るのは、（あの四本足のゲテモノ）フンバより断然よかったのに。城で飼えなくなつて放し飼いにしていたら、そんなに大きくなるなんて。

「もしかしたら、わしらはもツちエ←みツかの腹の中におるのかもしれない。やつはこの城ごと呑み込んだのかもな。腹の中なら、排泄されることもありましようぞ。どう思われますか、王様」

問いかけられ、我に返つた王様は、大佐を見、城を仰いでから、多量の煙を発している山に目を向けて答えた。

「もツちエ←みツかなら、まだ、ほれ、あの山に」

王様の馬鹿でかい手が指した先に、大佐が目を向ける。球を受け止めた木々の隙間から見える、山周辺の空は雲に覆われていて、第二大隊の消防部隊が活躍したためか、そのほとんどは白い――風がほとんどないため、煙はそのまま上に昇るだろう。

二人の間に長い沈黙が流れた。山から立ち昇る煙と、それじつと見つめたままの大佐に、王様は交互に目を向けながら、ためらいがちに手を下ろした。大佐が峻厳な顔つきを、いつでも協力しようと笑みを浮かべている王様に向けた。

「我々は、考え直さねばならぬ時を迎えたようです」

王様は城へ戻る大佐の背中を見つめ、後を追おうとして先代から言われていたことを思い出した――つまり、『ヴエブリチを妨げてはならぬ』ということだ。そこで、彼は大佐の背中に言った。

「休息こそ最大の英知を生む。急いてはならんぞ、大佐」

大佐が足を止めて振り返った。そして、城が揺れそうなほどの大声で笑う。

「いや、まったく。わしとしたことが、至らぬ考えを口にしてしまったようですな！ では、ゆっくり休んで英知を養い、日の出とともに会議としましょうか」

「うむ、それがよい」

二人はシェイクスピアの登場人物のように、演技過剰な様子で語らいながら城内へと消えて行った。

二人は何か忘れている。ついさっき目を向けた山火事が第一だ。

その山では、縦隊のできない第二大隊の第一中隊が見事な横隊で湖から水箱をリレーさせて火に当たり、第二中隊が土嚢で壁を作り、残りの兵士が火事の拡大を防ぐために木を切っていた――彼らがたどりついたとき、もツチエーミツかは飛び立った後だった。

第二大隊は素早い連携で、慌てふためくことなく怒号に従い、明け方までに火を鎮火させた。彼らは鎮火後の灰にも丁寧な水をかけ、燃焼地帯周辺の木々にも同じことをした。そして、ようやく城に帰

り着くと、夜明けの中を、疲れた体で煤や灰に汚れた装備を磨き、もとの位置に戻してから休憩を取った。

もちろん、取りすぎた。

第二は木元と魔女の治療に当たった医師で、彼は魔女の身体を鼻息荒く——ああ、くそつ、ハンティーが戻ってきた！——看終えた後、木元の手当てをするときに息をのんだ。彼がどれほど卑猥な男でも、この瞬間だけは敬虔な顔になった。戻ってきたハンティーも同じ表情で木元を見つめた。

木元の肌は焼け、髪はほとんど炭と化し、悪い夢でも見ているのか、その顔は苦悶の表情を浮かべていた——それは、はたから見ると、とても峻厳に見える。

卑猥な医師は手当てをハンティーに任せ、病室を飛び出して王様の寝室へと走りながら思った。

めど→めさの再来だ！

十四番変化の“十四”

日が昇って少し経ったころ、木元は丸い目を開けた。最悪な朝だった。悪夢に追われる途中で跳ね起きたように、身体が重く頭はぼんやりしていた。煤の混じった煙を吸い込んだため、彼の鼻孔は黒ずみ、空気のおいを変えている。頭は服を脱いだように新鮮で、顔やむき出しの部分同様、日光浴しすぎたようにひりひりする。

半身を起して、ぼんやりした視界であたりを見回すと――清潔な石造りの壁、真っ白いシーツを敷いた均等に並ぶベッド、石敷きの床、他に暖炉や扉のついた棚や木のテーブルとイス――、ぼんやりとした頭で病室にいるのだと思った。

「まあ、お目覚めですわ」

木元は声の方に頭を動かし、首筋の痛みで顔をしかめた。しかめた顔の痛み、いつそう渋面を作る。渋面を作った筋肉の動きに――これ以上無理だと思ったので、彼は視界に飛び込んだ女性に注目した。

その女性は一九世紀のメイド服のようなものを着ているが、あまり上品には見えない。結い上げた黒髪为天辺からスカートの裾に隠れた足もとまでは、目測で一八〇センチありそうだ。顔は比較的丸く、鮮やかな青の瞳は畏敬の念に輝いていて、服の四角く開いた襟元は、押しつぶした乳房の上半分を見せるほど深い。雪の降る日に家に帰ると、シチューを掻きませながら、ストーブで手袋を乾かすように言いそうな、そんな女性だ。

木元はぼんやりとした目で、金持ちには程遠いように見える女性から、下卑た笑みを浮かべている丸メガネに視線を移した。そいつはケツの穴に指を突っ込んで、その臭いを嗅ぎそうな顔をしている。「いかがです、お身体の具合は？」

木元はこんな風に丁寧に話しかけられたことがなかったので、少

々まごついてしまった。天辺に紫色の髪を一房だけ残した丸メガネを見つめたまま、言葉を探し——私は貴族、木元菊だ——いつも通りの自分らしさを取り戻す。しかし、この世界にやって来た時とは少し変わっていた。

「あのドラゴンはどうなった？」

木元の質問に、丸メガネの男が女性に尋ねるような視線を向けた。丸メガネは女性より十センチほど低いため、胸元にいく視線は背の高い男に比べてわかりやすいのだが、この丸メガネの男が彼女の胸に目をやる様子は、はたから見た木元でさえはつきりわかるほどの凝視だった。女性がそいつに険しい顔を向け、それから木元が見ていることに気づいて表情を取り繕った。

「もツちエーみツかのことだ」

木元は言ったが、その名前を思い浮かべるだけで感じていたバカバカしさはもうなかった。丸メガネが彼に顔を戻し、知的好奇心か性的興奮のような表情を浮かべてうなずいた。天辺の一房がお辞儀をした。

「そのことに関しては、王様から直々にお話があります」

こいつの顔には我慢できそうもないが、丁重な扱いというのは悪くないな。私の気品に気づく者が——たとえそれがケツの穴の臭いを嗅ぎそうなやつでも——いるというのは素晴らしい。丸メガネは壁にはまったドアを——手のひらを上にして——示した。

「よろしければ、ご案内いたしますが」

木元はベッドを下り、危険な脱出方法を編み出した魔女の姿を探した。ベッドの上にはいない。下にいるかもしれないが確かめたくない。そこで彼は尋ねた。

「魔女はどうした？」

女性が咳払いをして答えた。

「あの方は、お起きになられると、お食事を召し上がりに食堂へ行かれました」

ジト目を紫色の炎のような一房毛に向けて付け加える。

「どうやら、治療方法がお気に召さなかったようです」

「そのようなことはありませんよ、ハンティー。きつと、お腹が空いてらっしゃったのでしょう」

ハンティーと呼ばれた女性はジト目をやめなかった。そういうことか、と木元は思つて丸メガネに軽蔑の視線を向けた。丸メガネが、誤魔化すような笑みを浮かべる――足の裏の臭いを嗅ぎそうな顔だ。

「おまえには案内して欲しくないな」

丸メガネの表情が曇った。

「そんな……」

「私がご案内いたしますわ」

木元はハンティーにうなずき、違和感のある頭に手をやって……ベトツとした感触に手を引込めた。唇をすばめて上に目をやり、見えない頭を見ようと努力しながら、もう一度頭に触れる。ベトツ。急激に混乱と怒りが高まり、彼は丸メガネを睨んだ。

「わ、私の頭に何をした!」

丸メガネはどんな質問にも答えようという、協力的な笑みを浮かべた。

「えっ?」

「私の頭に何をしたんだ? 髪の毛はどこへ行つた?」

丸メガネは質問を理解したようだ。ずり落ちてもない眼鏡を押し上げ、医学的な話をしようとするやぶ医者のような顔になった。

「あなた様は、とてもひどい火傷を負われていたのです。我々は、炭となった髪を手で払い、火傷に効くお薬をお塗りいたしました」

木元の表情が変わらなかったので、丸メガネはやぶ医者のような説得する親切顔で続けた。

「ご参考までに成分をお教えいたしましょう――タツオの毛、サドの葉、王の鼻水、フンバのフン、ハエの実を、すりつぶしながら水に溶き、粘り気が出るまで練ったものです」

木元の表情が曇った。手についたベトツとしたものの臭いを嗅ぎ、曇り顔を嫌悪に歪める。丸メガネは困惑したように、ハンティーの

顔と胸に視線をやって戻し、汗の玉を浮かべ——毛も少々うなだれ——ながらさらに続けた。

「絶大な効果があります。確かに、確かに臭いはあまり良いとはいえませんが……」

「最悪だ」

「し、しかし、効果は絶大です。いにしえより伝わった靈薬で、即効性もあります。痛みはすぐに引くでしょう」

木元はもう一度臭いを嗅ぎ、顔をしかめてドアに目を向けた。この頭で連中に会うのか。気が進まないな。鬘が何か……私の鬘は？ 彼は部屋を見回し、扉のついた棚に近づいてそれを開けた。

「そこからでは、病室を出られませんよ」

困惑したハンティーの声を背中に背中に聞きながら、木元は棚の中身をざっと見た。小瓶、小瓶、小瓶、小さな木箱、小さな壺などが並んでいる。鬘はない。彼は扉を閉め、暖炉に目をやり、そこで燃えている木を見つめてあきらめた。

「王様の元へご案内いたしますわ」

ハンティーが不安と心配そうな様子でドアを開ける。まるで木元が暖炉に頭を突っ込んで、煙突から飛び出すのを恐れているようだ——もちろん、木元にはそんなことできないが。丸メガネも同じ心配顔をしていたが、こちらには少し希望の光が輝いている。木元はそれが気に食わなかったので、ハンティーにうなずいた。

「ああ、わかった」

木元は、廊下に出てドアを開けたままにしているハンティーの脇を抜け、左右に走っている廊下の左側に足を向けた。後ろからハンティーの遠慮がちな声が聞こえ、彼は首を振って引き返し、彼女の後に続いて王の待っているという部屋へと向かった。

ハンティーは緊張か何かで口数が少なく、周辺に響いているのはどこから流れてくる集団のいびきだけだったので、木元は自分の靴音の反響に耳を傾けながら、もツちエーみツかへの復讐心を固め

ていた。そもそも、冒険の始まりはやつのせいだ。あいつが自重して海辺で暮らさないから、こんなことになった。あいつが卑猥な姿ではなく、愛嬌のある顔をしていれば、もっと国民から理解を得られたはずだ。多摩川のたまちゃんとか、荒川のアラちゃんとかみたいに、住民票までもらえたはずだ。

木元は階段を上るハンティーの大きなお尻を見上げながら、なぜか自分の武器を確認した。腰に身につけていた剣は無くなっている。ま、どっちみちあれじゃドラゴンは倒せない、と彼は段を上りながら思った。あの村の連中に渡された斧でも役不足だったろう。人間の力じゃ無理だ。魔女の魔法は？ 嫌がらせ程度にしか効き目がない。やつが精神的に衰弱するなら、それも効果はあるだろうが、あのなりで存在していること自体に耐えられるなら何にだって耐えられるだろう。

彼のお腹が鳴ったので、ハンティーが足を止めて振り返った。木元も足を止め、ハンティーのお尻からさらに顔を上げた。

「腹が減ったんだ」

「まあ」

彼女が顔を赤らめた。違う、そういう意味じゃない。

「昨日からまともなものを食べてないんだ」

「で、でも私は、それほど……」

戸惑う様子に、木元は彼女がどういう受け止め方をしたのか理解した。うまく伝わっていないらしい。

「王のところへ行く前に、食事がしたい」

「ええつ、と」

「どういう言い回しをすればいいんだ？」

「食堂へ連れて行ってくれ」

彼女はようやく彼の意図を理解したようだ。照れくさそうな笑みを浮かべてから、言い訳がましい口調で言う。

「私はてつきり……あなた様が、その、私のお尻を見つめていらっしやったようなので……。その……。さ、早速、ご案内いたしますわ」

木元はうなずき、ハンティーが歩きだすのを待ってから、後に続いた。パンじゃなければいいな、と彼は思った。パンじゃなければ、何でもいい。ハンティーのお尻を見つめていることは、勘違いによる危険を伴うので、木元は壁を見つめながら進み、通路の途中にある窓では外を覗いた。時間の感覚を思い出す。昨日は……二日目だ！ 今日が三日目、今日のヴエブリチまでに戻らなければ、俺は連中に殺される。今日中にあのドラゴンを倒さないと……俺はサトルか何とかいうやつと同じ、アナフあベータ村の墓場で眠ることになる。

彼は窓の外に感じる自由を目に焼き付けるように、後方へ流れていく外の景色を、首が限界を告げるまで追いつけた。

食堂は王様が食べる場所であり、王様が食べていた場所でもあった。誰もいない、暖炉の火は燃えていない。テーブルはもとに戻り、食器の欠片は片付けられていたが、木元が斧で開けたバルコニーへの窓の留め金は壊れたままだった。

ハンティーが勧めた椅子に腰を下ろし、彼は食事が運ばれてくるまで待った。彼女の影響が冷めかけると——違う、そういう意味じゃない——彼は焦燥感を覚えていてもたってもいられなくなった。拳動不審で尋問を請けそうなほどきよろし、広い空間を見渡す。魔女も、王様も、大佐もない。扉の向こうに消えたハンティーの怒鳴り声が、窓と木元の心臓を揺らして消える——グズグズする患者にも同じ声で怒鳴るのだろう。

ひとしきり一方的な会話が終わると、彼女が食堂に戻ってきた。口元には親切そうな笑みを浮かべ、瞳にはまだ畏敬の念がこもっている。木元は背筋を伸ばし、膝の上でこぶしを軽く作り、焦燥感を一時的に忘れて、暖炉をまっすぐ見つめた。彼女が近づいてくる。

「お食事のご用意ができました、すぐにお運びするとのことですよ」
木元は生唾を飲み込んでからうなずいた。

「私は病室に戻らなければなりません」

彼女が彼の脇で前かがみになって続ける。その姿勢だと胸の谷間がはつきりと見える。見えすぎるくらいだ。

「王様はそちらのドアを出た先に見える、ドアの奥の応接間でお待ちになっております。あなた様のお食事が済み次第、お会いなさりたいようですわ」

木元はちらりと彼女に目をやり、素早く暖炉の方へ視線を戻した。いろいろと落ち着かなければならない部分があったのだが、彼女が去るまではどれも落ち着くような気がしなかった。応接間ね。わかったよ。

「色々と、ありがとう」

彼は生まれて初めて感謝したように、妙な照れくささと不安定な声を隠した。

「まあ、そんな。当然のことですわ」

彼女が上体を起こす。

「それでは、失礼いたします」

木元はうなずいた。ハンティーの後姿を追わないよう、暖炉を見つめ続ける。ドアが開き、閉まる音。数秒立つて、彼はようやく息を吐いた。止めていたことに気づかないほど固くなっていた。食事が運ばれ、食べ——とにかく、手を食い尽くしそうな勢いで食べるほどの価値があった、臭いを除いて——、むせながら、彼は思った。二度と会いたくないが、二度と会えないのはつらい女性もいるんだな。

木元は食事を済ませるとゲップをした。暖炉を見つめて炎のことを考え、鋭い刃が放つ火花と臭い息の思い出に顔をしかめながら、ぼんやりとドラゴンが火を吹く原理について思考を働かせた——焦りは食後のくつろぎに減退していた。卑猥な首を反り返らせ、振り下ろした時のドラゴンの姿が浮かぶ。その後の臭い。あれはゲップだったのだろうか？ 彼は暖炉を見つめながら王様を待たせ、立ち上がって彼女の示したドアへと向かった。

ま、いいさ。

十五番会議の“十五”

「まさか、めど→めさが封印されていようとはな！」

木元は応接間の出入り口で大佐の言葉を聞き、伝説は実在したのか、と感慨深げに思った。伝承が本当なら、あのドラゴンでも軽く倒せるだろう。鍬かなんか振って。

応接間は会議室のように見え、食堂より少し飾り気があった。壁の肖像画がそれだ。額縁はガラクタをつなぎ合わせたように見え、そこにはまった絵には、街を見下ろす王様の姿が描かれている。他にクロスのかかっていないテーブル。クッション、背もたれ、ひじ掛けのついた椅子が十脚ほど。窓は中庭に向いていて、やはりここにも暖炉があった——たぶん、めつぽう寒い季節があるのだろう。椅子には王様、大佐、魔女が腰かけていて、テーブルの上には木元の鬘の残骸が縮こまっている。

「何に封印されていたんだ？」

木元は空いていた大佐の正面の椅子に腰かけながら尋ねた。隣に座っている素顔の魔女が、鬘を指差して答える。

「これによつてです」

彼は鬘を見つめた。それによつて封印されてたのか。へえ、私の鬘によつて、ね。凄い偶然だな。魔女の向かいの王様が、居住まいを正して咳払いし、木元の注意を引く。

「一つ聞きたい、めど→めさ」

木元は、奇妙な区切り方だな、と思った。王様が続けた。

「もツちエ←みツか——つまり、あなたのいう“ドラゴン”——を、倒さずに味方に引き入れる方法はないものだろうか？」

木元の心にぼんやりとした疑問が浮かんだ。石像は私を見ているぞ。

「さあ？」

「王様」

魔女が言い、その声を強調するように間を置き、全員の脳に響き渡ったことを確信してから口を開いた。

「何を隠してるんですか？」

「何も」

「第一大隊に話を聞きましたよ。もっちエーみツかとは戦っていないそうですね」

王様は魔女を真っ向から見つめることができないようだ。瞳がきよきよきよ動き、隣の大佐に心配そうな表情を投げかける。大佐は王様をひとしきり睨み据えてから、峻厳な顔を魔女と木元に向けた。

「王が何かを隠しとすることは、わしも薄々気づいた」

王様が小声で何か——「僕が話したからだろ」——言った。大佐はその小声か誰にも理解できない頭の中の声にうなずき、王様に目をやった。

「前言を撤回し、すべてを打ち明けることが、わしらへの信頼回復につながると思いますかな、王様」

「わしら？ 大佐は知っているではないか」

「いや！ まったく何も聞いてはおりませんな！」

「話した」

「聞いておりません、王様」

「子供のころに飼っておったと話しただろうが！」

「初めて聞きましたな」

「話したんだ！ 僕はおまえに話し——」

「王様」

魔女が遮って、怒りで顔が赤黒くなった王様に、安心させるような笑みとうなずきを送る。王様は顔と指先を大佐に突きつけたまま、目だけを魔女に向ける。彼女の言葉が終わりしだい、大佐に共犯の罪——あるいは全責任——を認めさせる構えだ。

「大佐が知っていることは、私たちも気づいていました」

否定しかける大佐を手で制す。木元は王様と大佐を見比べ、妙に

納得した。頭の中では、ストロンボ街の露店で見た売買の映像が浮かんでいた。“彼らは誰も信頼しないんです” そう言った魔女の言葉は、どうやら本当らしい。

「大佐に話した通り、僕はあいつを飼っておった。大佐に話した通り……」

王様の話には、“大佐に話した通り” が複数回出てくる上、やたらと“誰だつてやってる” を使いまわすのだが、要約するところいうことだった。

王様は呼吸を始めたところに、異国の服装——ちょうど木元が着ているような、いやそれよりも派手な服装——の人物から、空の眩い目と同じ輝きをした球を貰った。彼はそれを大事に持っていたのだが、ある日突然割れ、もツちエ←みツかが生まれたのだ。彼は内緒で飼い始め——「最初は小さかったのだ」という王様の言葉に、魔女が「私の村を襲ったときも、今に比べれば小さかったんです」と言った——もツちエ←みツかはゆつくりとだが大きくなって行った。秘密にできなくなっても、フンバと同じ程度で問題はなかった。

しかし、彼が王位を継いだころ、もツちエ←みツかが急激に大きくなり、城には置いておけなくなった。そこで、彼はもツちエ←みツかをヒイッポ村近くの山に隠し、新大陸搜索の資金調達という名目で税を課して食料の費用を賄い（余談だが、これがサドルだか何だか言う名前の人物が『賛成』に投票した政策に組み込まれていた）、飼育係をつけ、ときどき様子を見に行った。食費の捻出は頭を悩ませる問題だった。彼は会いに行く時間を削って働き……

「大佐にも話したが、飼育係からの伝言が届いたのは、ヒイッポ村が襲われる前だった。飼育係はもツちエ←みツかに食われたらしい。大佐にも説明したが、僕からの伝言を持って行ったはずの少年がそういつておった。もちろん、その少年から村が壊滅状態にあることを聞いたのだ。誰でもそうする通り、僕は信じなかった」

王様が“大佐に話した通り” などと言うところで、指先をイライラと動かしていた魔女が、苛立ちを押さえるよう深呼吸した後で口

を開いた。

「大佐に話したことはよくわかりました。ところで、飼育係からの伝言はどういったものだったのですか？ 暴れそうとか、手が付けられないとか、そういったものでしたか？」

王様は首を振って答えた。

「伝言はそのようなことではなかった。ただ、『脱皮した』と」「脱皮か」

あれがな。木元はドラゴンの姿と脱皮を考えて思った。どんどん卑猥になっていくな、あいつは。魔女が尋ねるような視線を向けてきた。

「何か心当たりでも？」

木元は自分の考えを打ち明けず、首を振るだけに留めた。ヒイイツポ村を襲った後の巨大化が一時的なものである可能性を、どう説明しろと言った？ 少女に「やつは海綿体でできている可能性がある」と教えて、その説明を求められたら、どうやって理解させると言うんだ？ 沈黙が最良の答えであることもある。しかし、魔女の視線が鋭すぎたので、彼は別のことを言った。

「問題は、第一大隊が無傷だった理由と、やつをどうやって倒すかだ」

「倒さなければ、なんなのか……」

王様がしょんぼりした。うなだれた頭に載った王冠に、大佐が厳しい眼差しを向ける。

「あたりまえでしょうな。それより、なぜ第一大隊は無傷のままだったのか、話してもらいましょうか、王様」

王様がうなだれたまま答えなかったので、応接間に静かな空気が漂った。木元はその間に、ぼんやり浮かんでいた疑問を消化しようと、魔女に耳打ちするような小さな声で尋ねた。

「めど→めさはどこにいるんだ？」

魔女が顔を向け、聡明な瞳を見開く。続いてそれが細くなると、ぶつぶつと呟いてからうなずき、ようやく答えた。

「埋めた方がいい医者が、焼けた肌とその頭を見て、木元さんのことをめど→めさだと勘違いしたんですよ。王様も大佐もそう信じてるんです」

「私はめど→めさじゃないぞ」

「あれは作り話ですから。わかってるんですけど……それはそれで残念です」

魔女の声には魔法か何かの力がこもっていた。木元は少し居心地が悪くなった。ま、他人が何を信じようと勝手だ、と彼はぶっきら棒に思う。神を信じようが、イエスや輪廻を信じようが、サンタクロースを信じようが勝手だ。私だって、貴族と信じているからな。王様が顔を上げたので、二人は小声での会話をやめた。

「ヒイツポ村の人々には赦してもらえぬだろうが、僕ともツチエ←みツかは友達以上の仲だった。近隣の村や町から討伐要請がきても、なかなか命令が下せなかったのだ。それでも、長くは続かん。」

「僕は隊を組織し、討伐に向かわせた。第一大隊が手ぶらで戻ってきて、あいつが山におらぬことを知ると、一つの案が閃いたのだ。」

「第一大隊壊滅のうわさを流し、第二大隊も同じようにして、民衆にあいつが手におえないことを示そう、とな」

「民衆を騙そうという魂胆だったのですな！」

「人聞きの悪いことをいうな！　ただちよつと、勘違いしてくれんかな、と思ったただけだ」

「何をいっておられるのです。それが騙すと――」

「大佐」

魔女が遮って指先を突きつけると、大佐はピタツと口を閉ざした。よくしつけられた犬のようだ。

「黙ってください」

王様が信じられないものを見るように、魔女の指先と彼女の子供っぽい顔つきと、緊張した大佐に視線を動かす。木元は鼻をほじつて、鼻くそが真黒であることに驚き、それを床に飛ばしてから部屋の沈黙に気づいた。彼は分かっている範囲で理解した。

「ま、私にも、大切なものを守りたいという気持ちは、理解できなくもない」

彼は口をつぐんで、“木元の木”にしばらく思いをはせてから続ける。

「問題の一つは解決した。後は、どうやってドラゴンを倒すか、だ」
王様はうめいたものの、今度は何も言わなかった。四人は沈黙を考し、窓から差し込む光が静寂を照らす。食後のくつろぎ感が消えると、木元の心に焦燥感が戻ってきた。今日中に倒し、村まで戻らなければならないのに、どうやって倒すかわかってない。くそつ、レーザービームや核弾頭ミサイルでもあれば簡単なのに。

木元は大佐の顔に目を向けた。やつは口を開け、普段の険しい表情から、間の抜けた普通の人なら啞然としているような顔をしている。こいつが本物なら、軍を持つてればな。待てよ、こいつの“無敵”を利用して、ドラゴンに食わせるという手がある、と木元は思ったような気がした。食わせて、内部から攻撃させるんだ。多分、あの化け物の胃はイブカニアよりもでかいだろう。大佐なら動けるかもしれない——消化されなければ。

「けど、それだと時間がかかりすぎるな」

彼は口に出してつぶやいたが、その前からつぶやいていたことは気づいていなかった。そして、他の三人が彼のつぶやきを聞いていることにも気づいていなかった（魔女はそのことについて戸惑っていたし、王様は熱心に聞き入り、大佐は顔のごとく啞然としていた）。

「弱点が何かあればな」

彼はさらにつぶやきながら思考に集中し、もっちエーミツかの姿を思い浮かべてそれらしい場所を探した。

「あれが姿通りのものなら、全体が弱点になる。が、実際は炎にも耐えられる皮膚があつて、信じられないほど臭い息をしていて、剣や槍がバラの棘より小さく無意味に思えるほどでかい」

彼の思考に一瞬の閃光が走り、それは何か肛門に関係のあること

だと認識した瞬間、頭から消えた。

「肛門か。どこまでも下品な奴だな」

木元は大佐の顔に向けて苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。想像の中のドラゴンに向かって彼は言う。

「おまえのクソは飛び切りでかそうだ」

彼の思考——とつぶやき——を破ったのは魔女の声だった。彼女は大佐の愕然とした顔をちらりと見てから、居心地の悪さを隠そうとするように、凜とした響きを声に持たせて言った。

「もっちエ←みツかを倒すことも重要ですが、その前に見つけなければなりません」

王様という最良の拝聴者が向きを変えた。

「おびき寄せるかやってくる地点を予測しなければ——追い回すなんてことはできませんからね」

「ヒイイツポ村を襲ったのは、その近くにいたからだろう。今回も同じなんじゃないか？ つまり、山に隠れてたんだよ」

木元の発言に触発されたかのように、最良の拝聴者である王様が口を開いた。

「普段はおとなしいやつなのだ。実際」

二本指を立てて見せる。

「しか姿を見せていないだろう？」

「その」

大佐も同じように指を二本立てた。

「で多大な被害をもたらしましたがな」

「驚いたりして何かを壊すのは、誰だっただけのことだ」

「殺処分を検討しなければならいほどの壊しっぷりはなかなかありませんぞ」

魔女は王様と大佐の言い争いを無視して、木元に聡明な瞳を向けた。

「両方に共通点があったとしたら、どうです？」

「山だ」

木元は言つて付け加えた。

「木がたくさんある」

「育つた環境と似ていたから、とか？」

「他の共通点は、鳥がいること、虫がいること、それから……おまえがどちらにもかかわつてる！」

犯人を追いつめた名探偵並みの気持ちで、木元は魔女を指差した。
「な、えっ、違います！ それは偶然ですよ！」

魔女はトリックが暴かれると思つていなかった三流手品師が、観客に指摘されたかのように慌て、否定するように手を勢いよく振つた。

「私たちはずっと一緒に旅してきたじゃないですか！ 私が原因なら、アナフあべータ村にも、山で水浴びしたときにも、もツちエ←みツかは姿を見せたはずですよ！」

木元は魔女を見つめ、大佐を見つめ、王様を見つめ、過去を見つめてうなずいた。魔女の言う通りだ。山と魔女が揃つたときも、ドラゴンは姿を見せていない。となると、別の何かか、あるいは私が最初に考えたように……今度の閃光は前回よりも強く、彼は一瞬、走馬灯を見たような気がした。その死刑宣告的な閃きが頭でまともになると、彼は確信を込めて部屋中に宣言した。

「あの毒薬がやつをおびき寄せるんだ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0133y/>

討伐！ もツチェ↓みツか

2011年12月17日12時57分発行